短編ホラー小説集

ダメ坊主

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
短編ホラー小説集

【Ｎコード】
Ｎ０６８５Ｖ

【作者名】
ダメ坊主

【あらすじ】
初執筆作品！ホラーのショートショート集です。
中には２００文字小説もありますが、基本的には一話完結の１０００文字程度ですので空き時間などに読んで頂ければ嬉しいです（もちろんガッツリ読んでもらっても結構！）。
誤字脱字、疑問点、感想やコメントなどの様々な意見をもらえると嬉しいです。
※１００話で完結します。

この部屋いるかも（前書き）

※２０１１／８／１０訂正しました。

この部屋いるかも

働きたくないからという理由で大学に入学をする。
バイトと仕送りで生活をして、何事も無い平凡な毎日に飽きていた。
今日は友人の隼人の家で引越し祝いをする日だ。
僕達は引越し祝いと言ってただお酒を飲む口実が欲しかっただけなのだが

「はぁーい」と言って扉を隼人が開けるとそこにいたのは女性一人と男性二人
「引越しお疲れ」「酒持ってきたからさっそく飲みまくろうぜ！」と飲み仲間のバカップルが入室する。ぼくも「飲も飲も」とお酒を入れた袋を片手に隼人の家に入り込む。部屋はまだ片付け終わっていないのかダンボールがいくつか部屋の隅に置かれていた。
僕達４人は部屋に入った後早速お酒を飲み、たわいも無い話をした。その風景はいつもと変わらず、いつも通りの平凡の日常であり大学にいる間はこの関係が続くものだと信じていた。

深夜１２時も過ぎ、もうぼちぼちお開きかと思ったころ友人の彼女の顔が真っ青で気分が悪そうにみえる。その様子に彼氏（友人）も気が付いたのか「飲みすぎたか？」と心配そうに聞く。
「う～ん　違う。一時間前からずっーと女の人の声が聞こえるの、でも皆には聞こえてないみたいで少し恐くなったの、この部屋いるかも」

（……またかよ）
この子は前も僕の家でもこう抜かしやがった。彼氏（友人）には悪いが僕はこの子が嫌いだ。もしそれが真実であっても誰も得をしない事を言

うべきではないと思う。前回は自分の事だったので笑って我慢したのだが、自分の家でもしこんな事を言われたら気分が悪くなるのは当然だと思う。

「またぁ～冗談言ってぇ、もうそろそろ時間だし帰ろうぜ！」
僕は彼氏では無いしお人好しでもないがフォローをする。彼氏の友人も慌てて僕に合わせて帰宅しようとする。隼人は誤魔化されるのが気に入らなかったのか、友人の彼女に対して若干怒鳴り声で
「嫌がらせかよ！　俺がお前に何か悪いことでもしたのかよ！？もういい帰れ」
（自分の家に幽霊的な存在がいるとか言われたら怒るのは当然だな）
その後、僕達は隼人に追い出されるように部屋を出て行った。

あの日から1ヶ月経ち、あの事もあったせいで僕達はお互い距離を置いていた。そんな時に隼人から久々に飲みに行こうと誘われた。断る理由も無いので誘いに応じた。
夕方になり集合場所である居酒屋に入った
「お～い、こっちだ！」
隼人に手を振られ、僕は隼人のいる席に向かう。椅子に腰を下ろして店員にビールを注文する。店員が居なくなって隼人が深刻そうに僕に向かって言う。
「この前さあの子が俺の家で『この部屋いるかも』とか言ったの覚えてる？」
「あ～あれか、気にするなよ、僕の家でも言ってたからアイツ。隼人がキレたのはちょっとビックリしたけどさぁ」
「実は俺も聞こえてたんだよ女の声が引越し初日から……　俺はそういうお化けとか信じたくなかったから思わずあの子に怒鳴っちゃたんだよ」
「その話、本当！？」
「冗談と言いたいけど本当なんだ。しかもこの話には続きがあって

最近では姿が見えるんだよ！　しかもそれだけじゃない！　夜中に物音はするわ、金縛りにあうわ、もう嫌になるよ……」

隼人がそう言うと店員に頼んだビールが来たようだ、冷えたビールをとりあえず一口飲んで隼人を見る。

隼人をよく見ると目の下に濃いクマが出来ていて、少し痩せているような気がする。店内の明かりが暗いせいか余計に隼人の顔色が良くないように見える。そんな姿を見ても僕は隼人の言っている事を信用出来なかった。

「またぁ幻覚とか幻聴の部類じゃないの～、もしそれが事実だったら引越せばいいじゃん！」

「出来るなら俺もしてるよ」

「何で出来ないんだよ！　お前の家って親が家賃払ってるんだろ？」

「はぁ、お前さぁ親に言えるか『家に幽霊が出るから引越しさせて』って」

「言えないな……」

「そうだろ！　実は今日はお前に頼みがあって誘ったんだ」

「幽霊が出るから、家に泊めてくれとか言うんじゃないんだろうな？」

「……」

「お前がこの話を信じてくれなくても構わない。ただ俺はあの部屋に居たくないないんだ！　たのむ、お前の家に大学卒業まで住ませて欲しい」

「別にいいけど、家賃は取るぞ」

「ありがとう、感謝する」

僕の家に住むことになった隼人と僕は、隼人の荷物を取りに例の幽霊が出る部屋に向かった。

「まじで出るのかよ～？　雰囲気的に普通なような気がするけど」

霊感と言う言葉がある。字の通り幽霊を感じる力である。僕は幽霊とか一度も会った事ないから、霊感は無い。というか霊感の存在をまったく信じていないので僕が見る隼人の部屋は普通にしか見えない。
「たしかに今は何とも無いけど、俺が一人の時は毎日のようにあいつがいるんだ……」
そうこう言っているうちに荷物を簡単にまとめて僕の家に向かう。

「お前の家って久しぶりだな」
「狭いけど文句は言うなよ、いつでも追い出せる事もしっかりと忘れるなよ」
「分かってるよ、本当に助かる」

玄関の扉を開けて電気をつけ、隼人を呼ぶ
「入って」

隼人に入ってと呼びかけても入ろうとしない。
「どうしたんだよ！　早く入れよ、虫が入ってくるだろ」
隼人は玄関に立ったまま

「なっ、何で、何でお前がここにいるんだよ！」
そう言って隼人は玄関に荷物を置いたまま、走って何処かに行ってしまった。

この部屋いるかも（後書き）

僕（主人公）の家には何がいたのでしょうか……

小指探し（前書き）

※２０１１／８／１０訂正しました

小指探し

「嘘ぴょ～ん」
女の子がまた泣いた……
今日もまた《小指》をしていた。そしてまた薬指役の女の子が泣いた。
「ゴメンって！　泣かなくてもいいじゃん」
少し笑いながら謝るコイツは同じ仕掛け人をやっている僕の友人だ。

この頃は初対面の女の子と遊ぶ時はよく《小指》をやっている。《小指》とは小指役がゲームを進行して親指、人差し指、中指、薬指の順に夢の世界に行ってもらい《小指》を探してもらうというゲーム。ここまではいかにも怖そうなゲームなのだが、実際は薬指役の女の子を怖がらせるだけの心霊ドッキリみたいなものだ。

今日も《小指》未経験者と遊ぶ約束をしていた。
女の子達と合流して僕達は「面白い遊びがあるんだけどやろうよ！」といつものように誘う。いつもの電灯が少ない公園について今から遊ぶ内容を女の子達に教える。女の子達が嫌がっても、適当な事を言って《小指》に参加してもらう。ビビッているやつから順に薬指役、中指役、人差し指役を決める。いつもは僕が小指役（司会者）なのだが、今日は親指役をやることになった。
友人はいつも通りに《小指》を進行する。
司会者の友人がルールの説明などを終えるといよいよゲームが始まる
「それでは《小指》始めます。一人ずつ夢の世界に行ってもらいます。親指役から夢の世界に行ってもらうので、親指役以外は僕が肩を叩くまで目を閉じて、下を向き、耳を塞いで下さい。」
皆が下を向いて友人が僕の耳元に小さな声で
「迫真の演技をヨロシク！」

いつも通り友人がしているように僕は気絶をしたフリをする。
女の子達の反応を見たくなってきた僕は、うっすらとばれないように目を開けた。

おもわず僕は目を開けて、立ち上がった。
目を開けて見えたのはさっきまでいた公園ではなく、僕の頭の中のイメージにあった『夢の世界』であった。今居る場所が公園ではないことにパニックになった。僕が混乱していると背中にチクッとした痛みがした。思わず後ろを見ようとした時《小指》のルールを思いだした。

“決して後ろを向いてはいけません。後ろを向いたら現世に戻れません”

後ろを見ようとした僕は恐怖に包まれた。後ろを向いたら、現世に戻れませんって僕自身が司会者をやっていた時に必ず言っていたことだ。あまりの怖さに固まった。
また背中に何かが当たって、今度は声が聞こえた
「お兄ちゃん、遊ぼうよお兄ちゃん、遊ぼうよお兄ちゃん、遊ぼうよ」
僕は何も言わずに声が聞こえたと同時に走り出した。
逃げ切れたと思っていたところに、また聞こえるか聞こえないかの大きさの声で
「お兄ちゃんはもう返さないから……」
僕は走った、どれだけ走ったのだろう、分からないがこれだけ走ればさすがに追いつけないだろう。
「逃げても無駄だよ、だってここはお兄ちゃんが作った世界だから」
あれだけ逃げたのにもかかわらず、後ろから声がする。でも絶対に振り向かない。全身が恐怖で震えるのが分かる。逃げたいのに疲れと恐怖で動けない。背中には小さな小石や木の枝が投げられている

のが分かる。

僕は目を閉じ考えた……《小指》だ。

この遊びを終わらせるには小指を見つければ、元の世界に戻る事ができる。そう思ったら体が軽くなった気がした。この恐怖に体が慣れてしまったのか、僕は目を開けまた走った。小指を探しながら。走っても、走っても、走っても後ろの子供の声が聞こえる。

「どうせ見つけれないよぉ〜、そんな事はやめて私と遊ぼうよ」

それでも僕は小指を探しながら走って、走って、走った。

「……見つけた」

僕は見つけた小指を掴むと小指が消えて全ての景色が真っ暗になって後ろから何かに抱きつかれた。思わず驚いて体がビクっと反応する。すると女の子の声が聞こえた

「お兄ちゃんまた来てね！　次は絶対に返さないからさ！」

「嘘ピョ〜〜ン〟」

友人の声がして、目を開けると女の子が泣いている。いつもと同じ《小指》の風景だった

小指探し（後書き）

遊び半分でこういう遊びをやっていると痛い目にあいますよ……

美人な彼女（前書き）

※２０１１／８／１２訂正

美人な彼女

会社の同僚からの誘いで参加した合コンで彼女と知り合った。彼女の容姿は一言で言うと『美人』。容姿は僕にとっては完璧。僕は彼女を見た瞬間に一目惚れした。僕みたいなサラリーマンなんか相手にしないだろうと思っても、僕はアプローチせずにはいられなかった。当たって砕けろ精神で攻めて携帯番号を手に入れる事に成功。その後も猛アプローチを繰り返し、努力のおかげか美人の彼女と付き合うことになった。

彼女は外見だけではなく、中身もとても優しく僕には勿体無いぐらいの彼女で僕は本気で結婚を考える。
僕は早く結婚したいという考えは彼女にも伝わり、付き合ってから僅か3週間で僕達は入籍届けを提出した。お互いが幸せオーラ全快で周りから見れば二人はバカップルに見えるだろう。外でも中でも関係無しでイチャイチャしていた。
それからの結婚生活は順調で、それと同じく仕事も昇進して公私共にかなり順調のはずであった。

昇進すれば当然忙しくなり、毎日帰る時間は深夜１２時を回る。僕は自分の家庭のために必死に働いた。

ある日、深夜2時頃帰宅した時だった。
「なんで毎日こんなに帰るのが遅いの？　最近はお酒もよく飲んでくるみたいだし」
「仕事だよ、疲れているから先に寝るね」
その日は彼女と軽い口論をした。

次の日、深夜１２時に帰宅。
「あなた女の人の匂いがする。もしかして浮気してる？」
「あぁ、今日は部長に誘われて、部長の奥さんがやっているスナックに行ったからじゃないの」
「そんなこと言って誤魔化さないでよ！　浮気してるんでしょ」
「してないよ！　くどいなぁ～何で仕事が忙しくて、お前がいるのに浮気しなきゃいけないんだよ」
この日は初めて僕は彼女と喧嘩をした。浮気はしていないが結局スナック行った僕が悪いと思って謝って終わった。
ただ、その喧嘩から日に日に彼女は僕を束縛していった。

最初は浮気の事をまだ引きずっているから全然問題無かったのだが、今では１時間に一回は携帯の着信音が鳴り、携帯にでなければ会社に電話が掛かってくる。それでも、電話での束縛はなんとか我慢できた。
ただ会社に盗聴器・盗撮カメラ発見調査専門の業者が入って作業をしている時、少し恐怖を覚えた。
ピッーーーーー　ピッーーーーーーー
僕のスーツと鞄に反応したのだ。盗聴器発見器が。
「何だこれ！？」
「これは盗聴器ですね……見覚えがありますか？」
「すみません、全然無いです」
業者の人には覚えが無いと言ったが、正直僕は盗聴器を仕込んだ人物が誰か分かっている。
……彼女だ。

この日は仕事が終わってすぐに家に帰った。
「あなた今日は早いのね。それに何をしているの」
僕は急いで自分の荷物を纏めて、玄関に向かう。

「電話までは我慢できた、でも盗聴器はお前の性格を疑うわ！　お前とはもう離婚する。」
彼女が何かを言って泣き崩れていたが、僕はそれを無視して家から出て行った。

彼女の番号は着信拒否して番号を通知しないのも拒否をした。会社にも事情を話し、彼女からの連絡は拒否してもらうようにした。離婚は弁護士の方に頼んでおいた。

彼女と別れてから1週間経ち
仕事が終わって、新しく住みだしたアパートに帰宅したのだが
（鍵が開いている？鍵閉めたはずだったんだけど）
たぶん閉め忘れたんだろう。玄関のドアを開けると

ジャーーーーーーーーーーーー
（ビクッ！）
少し驚いたが風呂場から水がでているようだ。
（誰かいるのか？もしかして彼女が来たのか？）
僕はゆっくりと風呂場の取っ手に手を近づけて、思いっきり扉を開けた。

風呂場には誰もいなかった……

さっきの水の音はどうやら水道管が壊れていただけだった。安心した僕はとりあえず冷静になり水漏れを修理してくれる業者に電話した。
「お電話有難う御座います。水道トラブル○○支店○○が承ります。……もしもーし、もしもーし……お客さん聞こえますか？　もしもーし」

僕は何かの紐で首を絞められていた
相手の姿は見えないがこの香水の匂いは彼女だろう
そんなことを考えていたら目の前が真っ暗になった

僕は目を開けた。
とっさにクビに手を当てようとしたが両手が動かない、さらに両足も動かない。どうやら自分の両手両足、胴、首など体のいたるところに手錠や鎖などの拘束具がはめてある。
自分の周りを見るが見覚えが無い場所
「あなた起きたの？　ご飯がもうすぐ出来るから待ってて」
僕は自分の状況を理解してとっさに叫ぶ
「誰かぁぁ！　助けてくれぇー！」

「誰にも聞こえないよ、これから毎日二人っきりだね」

美人な彼女（後書き）

外面も大事ですけど、内面も大事ですよね

飛び降り自殺（前書き）

※２０１１／８／１２訂正

飛び降り自殺

この道を通るたび、あの人はビルの上から飛び降りる
あの人の顔ははっきりとは見えないがいつも上下黒のスーツ
飛び降りた先に行くとあの人はいなくなっている
もう数え切れない回数の飛び降りる彼を見ていたので
最初ほどの驚きは無いが、今回は違った
飛び降りているあの人と目があった
僕はあの人の事を知っていた
上下黒のスーツ、青色のネクタイ、黒縁メガネ
あの人は僕だった。そして思い出した
会社をリストラされ、家族には見放されて、自殺をした僕自身だ
あの日自分の命を終わらせた
あの日から自分の自殺を何度も何度も見ている
あと何回見たら僕はこの地獄を終わらせれるのだろうか
あっ！　また僕がビルの上から落ちてきた

飛び降り自殺（後書き）

自殺をしてきた人達は永遠に自分の死亡する瞬間を見続けているのかもしれないですね

優良物件の隣人（前書き）

※２０１１／８／１２訂正

優良物件の隣人

一階に４部屋、二階に４部屋の８部屋あるアパートで周りは田んぼで囲まれている。駅から遠いが１ＬＤＫ風呂トイレ付きで家賃が２万６千円。と激安でとても良い物件なんだが入居している住人は２０２号室の人と今日引越したばかりの２０３号室の僕だけだ。
もしかして幽霊がでる物件だったりしてと考えてみるが、僕は幽霊とか信じてないし、たとえこのアパートで自殺者や死んだ人がいたとしても気にしない。逆に幽霊が出るとしたら、会ってみたいと思うほどだ。

引越しが終わって隣の人に挨拶をするために
２０２号室のチャイムを押した。
『ピンポーン』
「いないのかなぁ？　でも電気はついてるし」
もう一度鳴らしてみる
『ピンポーン』
「電気をつけっぱなしのまま外出してるのかな？」
僕は挨拶はまた明日にでもしようと思い、自分の部屋に戻り荷物の片付けをした。片付けも一段落して、風呂に入ってベッドに潜った。

『ドン！　ドン！　ドン！』

寝始めて2時間ぐらいした時、物音がうるさくて僕は起きた。時計を見ると深夜１２時を回っていた。
「こんな時間に勘弁してくれよ」

『ドン！　ドン！　ドン！』

僕は頭にきて玄関を出て、２０２号室のチャイムを鳴らした。
『ピンポーン』

「おいおい、無視かよ」
もう一度鳴らす。しばらく待っていても２０２号室の人が出てこないので、僕は少し大きな声で
「隣に引越してきた者ですが、物音がして寝れないので静かにしてもらえませんか」
と言って自分の部屋に戻った。部屋に戻ると朝まで物音はしなかった。

今日は昨日の事もあり、隣人への挨拶はしなかった。
そして夜、睡眠中にまた
『ドン！　ドン！　ドン！　ドン！』
昨日よりも酷い物音が聞こえて、また起こされた。時計を見ると深夜3時、さすがにこの時間に起こされて僕は堪忍袋の緒が切れた。
「マジでムカついた」
本気（マジ）でキレた僕は、急いで２０２号室に向かって今回はチャイムを鳴らさず、玄関の扉を殴るように3回叩いて
「お前マジでいい加減にしろよ！　出てこいや！」

「ハイ、無視ね。了解」
隣人に呆れた僕は部屋に戻り。携帯電話で管理人に電話して、管理人から２０２号室の人を二度とこんな事が無いように直接注意してもらう事にした。

次の日の夜
『ドン！　ドン！　ドン！』

また、隣から物音がする。今日、管理人に注意されたはずなんだが懲りていないようだ。僕はまた携帯で管理人に電話をした。
「プルルルル、プルルルル、ガシャ」
「あのもし……」
「只今留守にしております、ピーという発信音が鳴りましたら
お客様のお名前とご用件をお話下さいピーーーー。」
管理人の携帯は留守番電話になっていて、僕は留守電に用件を言って電話を切る。

『ドン！　ドン！　ドン！』

物音がまだ鳴っているので僕は仕返しのつもりで僕は耳栓をして音量ＭＡＸで音楽を流し続け、ベッドに潜り込む。

朝起きて、音楽を止めて耳栓を外した。
携帯を手にしてもう一度管理人に電話したが、留守電だった。僕は小腹が空いて、冷蔵庫を開ける。
冷蔵庫の中は引越ししたてということもあり何も無かったので、しょうがなくコンビニに出かける事にした。外に出て玄関を閉めた時、僕は驚いた。
玄関のドアにスプレーで
『死ね』『出て行け』『殺すぞ』などの言葉がドア一面に書かれていた。
「何だよ、コレ……」
コレをやったのは絶対に２０２号のやつだ。どうせノックしても出ないのは分かっているのでとりあえず管理人から電話がかかって来るのを待つことにする。ただいつまでも待っているわけにもいかないので、僕は空腹を満たすためにコンビニに出かけることにした。
車の鍵を遠隔操作で開けようとした時、自分の車の異変に気が付いた。

タイヤが全てパンクしていて、ガラスは全て割れていて、車の中はゴミでいっぱいになっている。

1分ぐらい硬直した。

「ここまでやるかよ……もう限界だ。殺してやる！」

僕は隣人に対して殺意がわき、２０２号室に向かった。ノックもせず鍵が閉まっているのにもかかわらず

僕はドアノブを持ち、扉を無理やり開けようとする。

「お前がやったのは、分かっている！　殺してやるから今すぐ出て来い！」

僕は３０分ぐらい大声を出しながら、２０２号室の扉を開けようとしたが扉が開くことは無かった。

僕は疲れ、警察に電話をかけるために自分の部屋に戻ることにした。

玄関の扉を開けた瞬間

『ガァン！』

僕の後頭部に激痛が走ったと同時に僕は倒れる。意識が朦朧（もうろう）としている中、誰かに引きずられていくのが分かった。

部屋に引きずられて、目線の先に頭から血を流している管理人を見つけると、もう一度後頭部を殴られ

僕は意識を落とした

優良物件の隣人（後書き）

隣人の物音は何の音だったのでしょうか？　隣人の目的は？　あなたの想像にお任せします。

深夜のコンビニ（前書き）

※２０１１／８／１５訂正

深夜のコンビニ

僕はアルバイトを転々として、今現在の勤め先はコンビニ店員。この職場の店長は僕に対して

「深夜勤務の人達がすぐに辞めちゃうから助かるよ！　期待しているから頑張ってね」

と優しくしてくれた。店長に仕事を教えてもらいながら1ヶ月の研修期間が終了した。今日から一人で深夜勤務をすることになった。

僕が働く職場は、田舎のコンビニで深夜0時を過ぎるとお客さんがまったく来なくなる。来たとしても両手で数えれるほどの客数であった。

――22時00分。

僕は夕方勤務の高校生二人組みから引き継ぐ。この時間からは僕一人での勤務になるので、一人でレジ打ちをしながら発注作業などの作業を進める。商品の発注作業が終わって時計を見ると深夜0時を回っていた。この時間になるとお客さんは誰も居なくなる。

――深夜1時00分

レジでボーっとしていたら

『……ポト』

ポテチが落ちた。僕は落ちたポテチを元の位置に戻して、レジに戻る。

『……ポト』

またポテチが落ちた。今度はしっかりと落ちないように棚に戻して、レジに戻る。

――深夜1時30分

僕は棚にある商品の整理をしていた。下段の棚を整理しようとして、しゃがんだ時
『ガン！』
窓側から音がして立ち上がって見るが何もない。一旦外に出て確認もするが、何もない。
季節は冬、僕は白い息を吐きながら寒さに負け、すぐに店に戻る。
気味が悪くなってきたが僕は一人で店番を任せられているのでどうする事も出来ない。僕は自分自身に勘違いだと言い聞かせ、まだ途中の仕事の続きをした。

――深夜2時30分
僕はトイレに行きたくなった。でもさっきの事があって、ビビリな僕はトイレに行きたくなかった。
でも人間の生理現象には逆らえない、我慢が出来なかった僕はトイレに駆け込む。小をしている途中

トイレの電気が消えた

僕はパニックになり、思いっきり小をぶちまけた。小を無理やり止めてトイレから急いで出る。
（なんなんだよ……）
再びトイレに入ってみると電気はついていたので、僕が汚してしまった便器を掃除する。

――深夜4時00分
もうこの時間になるとやる事が無いので僕は雑誌コーナーで立ち読みをしていた。本を読んでいる時、店の明かりが一瞬消えてまたすぐついた。僕は店の中の蛍光灯を見回す。特になにもなかったので、読んでいた雑誌を本棚にしまう時……
店から20メートルぐらい離れた場所から、こんなにも寒いのに赤

い薄手のワンピースを着た女の人がこちらに向かってきているようだ。しかも僕めがけて走っているように見える。
彼女が此方に近づくごとに、僕の体もどんどん硬直していく。彼女はもの凄いスピードで走ってきて、そのままコンビニの窓にぶつかって倒れる。

僕は窓越しに倒れた彼女を見る。

彼女はすぐに目を開けて、僕に目線を向けると糸に引っ張られたかのようにすぐ立ち上がる。立ち上がった彼女は僕から目線を外すことなく、そのまま店の入り口に向かって歩き出した。
（動け！　動け！　動け！）
恐怖で動けない体にムチを打って、逃げるようにトイレに駆け込んだ。トイレに入って、震える手で鍵を閉めると
『ピンポーン、パンポン』
お客さんが入店時に鳴る音だ。
『コツ、コツ、コツ、コツ』
彼女の足音が聞こえる
『コツ、コツ、コツ、コツ』
僕のトイレの前で、足音が止まった。

『……ドン！　ドン！　ドン！』
彼女が僕のトイレのドアを叩く
『ドン！　ドン！　ドン！……』
彼女は諦めたのか、扉を叩くのを止めた。

『ガァン！　ガァン！　ガァン！』

さっきと比べ物にならない音がする。彼女は体全体を使って、扉に向け体当たりしている。
僕は耳に手を当てて
「俺が何をしたってんだよ！　来るなぁ！」

――早朝５時００分
パートの人が出勤して、すぐに深夜勤務の新人がいない事に気が付き探した。店を探し回り、トイレの鍵が閉まっているのに気が付いたパートの人はノックをする。
……ノックをしても返事が無いので、トイレの中で何かあったと思い１１９番に電話した。
救急車の他にレスキュー隊も来て、トイレのドアが開けられた時、中に入っていた男性はトイレの便座の上で体育座りのまま耳を塞ぎ
「来るな、来るな、来るな、来るな」
と小さな声で何度も何度も言っていた……

深夜のコンビニ（後書き）

深夜のコンビニって昼間と違って、全然雰囲気が違いますよね？
あなたの家の近くのコンビニでも様々な怪奇現象が起きているかもしれません

家の中の悪魔（前書き）

※２０１１／８／１５訂正

家の中の悪魔

僕にはお父さんがいない
僕にはお母さんもいない
僕の家には悪魔しかいないんだ
悪魔達は何か気に食わない事があると
いつも僕を殴ったり蹴ったりするんだ
僕が殴られている姿を見て
悪魔達は喜んでいるんだ
僕も抵抗した事はあるんだよ
一人で家を飛び出しておまわりさんに助けてもらおうとしたんだ
でも、おまわりさんは僕を相手にしてくれなかった
おうちに帰ってからは悪魔達は本当に凄かった
殴るだけではなくて僕の手と足の爪を全部取っちゃたんだ
一枚一枚剥がすたびに
僕は血と涙をいっぱい流した

それから悪魔達の遊びは日に日に凄くなったんだ
僕の体中を包丁で切ったり
僕が吐くまでご飯を食べさせたり
僕が気絶するまで首を絞めたり
毎日地獄だったんだ
だから僕は悪魔をやっつける事にしたんだ
僕は包丁を持って
寝ている悪魔達をやっつけたんだ
これで僕も悪魔の一員になってしまったけど
とってもうれしかった……」

家の中の悪魔（後書き）

この話は「虐待」をテーマに書きました。

呪いのビデオ（前書き）

※２０１１／８／１６訂正

呪いのビデオ

大学一年生の夏休みに４人は１泊２日の京都旅行に行く事になった。
僕達四人は京都に着いてから観光を一日楽しみ、宿泊先の旅館に向かう。旅館に着いた４人はカウンターでチェックインをして、宿泊する部屋に案内をされる。
案内後４人は浴衣を手に取り温泉に向かい、露天風呂に入り、その後の食事も楽しんだ。

食後４人が部屋で待ったりしている時、一人が鞄から一本のビデオを取り出す。
「コレ持ってきたんだけど、皆で見ようぜ！」
「何それ？」
「聞いて驚くなよ、大学で噂になっていた『呪いのビデオ』だ」
「面白そうじゃん！　見ようぜ！」
温泉と食事以外やる事が無かったので、４人は『呪いのビデオ』を見ることにした。ビデオをデッキに入れ、再生ボタンを押す。

ピーーーーーーー

「何だよこれ！　カラーバーが映ってるだけじゃん！」
「そうだな……ちなみにこれを見るとどうなるんだ？」
「見たら死ぬらしんだけど……映っているのはカラーバーだけだから、全然面白くないな」
「もう消そうぜ、つまんないし」
「そうだな」
ビデオを停止して、ビデオを取り出す。
テレビの電源を消した時、真っ暗のテレビ画面を僕が見た時

「わぁっ！」
テレビ画面越しに僕達と一緒に座っている、いるはずのない男性と目が合った。慌てて後ろを振り向くが友人３人がいるだけだ。
「見た？」
「えっ！？　何を？」
「テレビに男の人が写っていただろ」
「見てないけど……」
「なんだよ、ビビらそうとしてるのか？」
「いや、間違いないって！　洋介のとなりに座ってたんだよ！」
「ワハハハハ！何だよそれ、全然恐くないぞ～」

皆が友人を馬鹿にするように笑っている時携帯が鳴った。携帯画面を見ると『公衆電話』からだ
今時公衆電話から電話？とか思いつつも電話に出る。
「もしもし、どなたですか？」
「……シネ。シネシネシネシネシネ」
僕は驚き携帯から手を離した。携帯が床に落ちて、携帯から部屋中に響き渡る。
「シネシネシネシネシネ」
僕は慌てて携帯を取り、通話を切る。
「なんだよこれ……」

『ドン！　ドン！　ドン！』
天井、床、壁。上下左右から物音がする。僕達４人は一旦顔見合わせると一斉に部屋から逃げようとする。
「何で開かないんだよ！」
「早く開けろよ！　急げ！」
「だから、開かないんだって！」
４人はパニックになりながら、必死で扉を開けようとする。

『ガラガラガラガラ』
ベランダの方から扉が開いたような音がする。４人は動きを止め、目線を部屋の扉からベランダに向ける・ベランダから入っていたものは……

人。人。人。人。人。人。

男性に女性、子供から老人まで複数の人がベランダから入ってきた。
それらはまるで生気が無く。
皆小声で
「シネシネシネシネシネシネ」
と言いながらこちらに向かってくる。
「おい！　早く開けろ！　あいつらが来る！」
すると、願いが通じたのか扉が開いた。四人は一斉に旅館の外に向かって走り出した

彼らは戻って来なかった
次の日旅館には彼らの荷物が残されたままだった
呪いのビデオと一緒に

呪いのビデオ（後書き）

呪いのビデオは今でもまだ……

高収入アルバイト（前書き）

※２０１１／８／１８訂正

高収入アルバイト

僕は高校卒業してからアルバイトを転々としていた。俗に言うフリーターってやつだ。

そんなある日、ネットのバイト募集覧で『高収入アルバイト　一回３００万円』というのを見つけたのが始まりであった。

当時僕はバイトで稼いだお金をほぼ全てギャンブルにつぎ込む生活をしていた。ギャンブルで勝つ事ができればバイトなんかしない。

僕はこのバイト募集を見た時に「これだ！」と思った。バイト内容は一年間泊り込みで体重を増やし続けるだけで、一年間の衣食住全て会社が持ってくれる。一年で楽をして３００万円も稼げるなんて……なんておいしい仕事なのだろう。僕は早速この会社に電話をして、面接をしてもらえることになった。

しばらくして僕は会社に向かった。『アントロポファジー（株）』この会社の名前だ。会社に着いて僕は面接会場に案内され、番号札を渡された。待合室には結構な人数が面接に来ていて、年齢も性別もバラバラだ。

「１１番の方コチラにどうぞ」

「失礼します」

「コチラにお掛けになって下さい」

僕は指示された席に座って面接官と向き合った。

「まずこのアルバイトの説明をしますね。今回のアルバイトは体重増加のメカニズムについて研究をするために募集しました。仕事場所は日本の近くの孤島の研究所で仕事をしてもらいます。そこでは一日１回の簡単な検査をさせていただきます。検査は健康診断みたいなものです。もちろん食事は会社から支給させてもらいますし、温泉や映画館などの娯楽施設も充実していますのでとっても楽な仕事です。期間が一年間で終了時には必ず３００万円の給料をお支払いさせて頂きます。一応伝えるべき事は伝えましたので、質問があ

ればどうぞ、無ければこのまま採用という形にさせて頂きます」
「ちょっと質問いいですか??」
「何でしょう?」
「まず一つ目は仕事中に自宅に帰る事は出来ますか??　それと二つ目は途中で辞める事はできますか??」
「では一つ目の質問ですが……研究所の資料などの情報漏洩の可能性があるため、一年間仕事が終わるまでは帰す事は出来ません。二つ目の質問は…辞める事は出来ますが一つ目の質問と同じく情報漏洩防止のため、辞めても帰る事は出来ません。ただ一年間の生活は保障します」
「分かりました。仕事は受けさせて頂きます」
「それでは、コチラにサインをして下さい」

「それではまた後日連絡させて頂きます、今日は面接お疲れ様でした。」
「コチラこそ面接有難う御座いました、それでは失礼します。」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

次の日、携帯に連絡がきた。
『一週間後の○○日１９：３０に会社集合で荷物は着替えのみでいい』
という連絡内容であった。
僕はアパートを解約して、アパートにあるほとんどの荷物をリサイクルショップに売り払った。

僕は約束の日時に会社に着いた。会社の役員の方にバスに案内されバスに荷物を載せ、バスに乗った。中に入ると僕と同じくバイトの方々１０名が椅子に座っていた。しばらくするとバスが動き出して○○港についた……

（どうやら目の前の船に乗るようだ）
僕は荷物を受け取り、船に乗り込んだ。やる事が無いので僕は船の操縦士と他愛の無い話をしていた。しばらく話していたら、どうやら研究所がある孤島についたらしい……操縦士の話だと此処は一応日本の領域である事が分かった。島に着いて僕は荷物を持って船を降りようとしていた時、操縦士の人が小さな声で
「まだお若いのに……」
と言ってるのが聞こえた。

日本から少し離れた孤島に着いた僕達はそれぞれが疑問を持ちながら周りを見渡す。なぜ皆が疑問に思ったかって？
この孤島には何も無いんです。木も岩もなく平地っていうのが正しいのかもしれない……
僕は慌てて役員の方に問う
「あのぉ～研究所はどこにあるのですか？」
「あっそっか！　説明してなかったですね。研究所はこの島全部の事を指すのです。もっと詳しく言うと、あなた達が立っている地面の下、つまり地下に研究所があるのです。今からそこに案内しますね」
役員の方にそう言われて僕達は何も言わずに彼についていった
「此処ですね」
彼はそう言っているが着いたそこには何も無かった
「えっ！？　何も無いんですけど？」
「此処ですよ。ここが研究所の入り口です」
彼はそう言い地面に手を伸ばして、研究所に繋がる入り口を開けた。入り口の蓋を開けた先を見ると先が見えない階段があった。
「それではお入り下さい。明かりは今点けます」
明かりが点いて薄暗い階段を役人の人を先頭に僕達１２人は階段を下り始めた。５分ぐらい下り続けるとそこには扉があって、役員の方が扉を開けると

（うわぁ！　眩しっ！）
目を瞑ってしまうぐらいの眩しい光が僕達を包み込んだ。ゆっくり目を開けるとそこは想像上の研究所では無く、まるで高級ホテルのようであった。
「今日から皆さんには此処に住んでもらいます、部屋に案内する前にまずこの施設の説明をします。今ここが地下一階でロビーになります。基本的にここは自由スペースになります。地下二階は女性フロア、地下三階は男性フロアになっています。それぞれに巨大浴場とトイレがあります。地下４階と５階は娯楽フロアになります。コチラは後で自分の目で確認して下さい。地下６階は食堂になります。ここでは朝８時～夕方５時までは料理人の方が食事を作ってくれます。夜食やドリンクなどもここに置いてあるので自由に持ち帰っても構わないです。地下７階以降は研究所となっています。コチラは検査の時以外は絶対に立ち寄らないで下さい、研究の邪魔になりますから。フロアとフロアの行き来は全てエレベータとなっており、エレベータを使用するためにはこのカードを使います」
そう言って僕達１１人に番号が入ったカードを渡していく……
僕のカードにはＮＯ．００１１と書いてあった。その後、部屋に案内され僕は部屋に入り少し疲れたのか風呂に入らずにすぐに寝た。

朝８時に起きて、９時頃に『検査があるため全員地下７階に来てください』と放送があって、僕達はそれぞれカードを持って地下７階に向かった。地下７階は病院の中みたいな感じで病院特有の臭いがした。１０分毎に一人ずつ呼ばれ、僕の番がきた。部屋の中に入る白衣を来た中年の男性がいた。
「始めまして。僕はここで医師をやっています。気軽に先生と呼んでください。これから毎日この時間に皆さんの検査をします。健康診断みたいなものなので３０分ぐらいで終わるので安心して下さい。今日は血液検査をします。血液検査は一週間に一回やります。それでは、腕を出してください」

僕が腕を出すと注射で血液を抜かれた。
「今日はコレで終了です。あとの時間は自由に過ごして下さい。また明日宜しくお願いします。」
僕はそう言われて部屋を出た。

それから毎日天国だった……

朝の検査以外は好きな時に食べ、好きな時に遊び、好きな時に寝た。
そんな生活を続けて半年がたったある日の事。
今日はいつものメンバーで麻雀をする約束していた。メンバーが揃った時、メンバーの1人が僕に
「そういえば、今日あの子見ないよね」
「あの子って誰ですか」
「あの子だよ。いつも一人で映画館に引き篭もっている子。朝の検査にもいなかったし」
「そう言われるとそうですね、何かあったんでしょうか？後で役員の方に聞きましょうか」
麻雀が終わって、部屋に戻っていく時に役員の方がいたのでさっき話していた事を聞いた
「あの～○○さんって見なかったんですけど……何かあったんですか？」
「あ～○○さんね、帰ってもらったよ」
「えっ！？　1年間は帰れないのでは無かったんですか？？」
「いや～毎日毎日施設の中にいたら、重度の鬱病にかかってしまっていたみたいでさすがにここの施設に置くわけにはいかないので、昨日本州に帰ってもらいました」
「そうですか……」
僕はそれなら仕方ないと思って字自分の部屋に戻った。ただ、異変

はそれだけで終わらなかったのだ。

それから1週間ごとに一人また一人といなくなっていった・・・・役員の方に聞いても精神病がどうとか、この島で治せない病気だという事で帰ってもらったというのだ。どんどん人が減っていき、最初は１１人いたバイトの人も今では3人。それでも僕達はいつも通り、遊んで食べて寝るという生活をしていた。いつも通り遊んで部屋に入ると役員の方が部屋に尋ねてきた。

「夜分遅くすいません。ちょっとお時間よろしいですか？」

僕は扉を開いて

「なんですか？」

「少し大事な話がありますので、地下7階に来てください」

僕は何の疑問も持たずに役員の方と一緒に地下7階に向かった。地下7階に着いて、部屋に入るといつもの先生がいた。

「今朝検査をし忘れた事がありますので、とりあえずこのマスクを付けてください」

僕は先生の言われた通りにマスクを付けた

（あれ？）

マスクを付けた途端、僕の瞼（まぶた）はゆっくりと閉じていった……

（さぶっ！）

あまりの寒さに僕は目を開けた。だが両手両足を固定されていて身動きが取れない。周りを見るといくつもの生肉を冷凍保存している倉庫のようだ。近くのあった袋を見ると

『食肉（人肉、手）』や『食肉（人肉、足）』とその他にも色々あ

り一番驚いたのが『食肉（人間1頭）』
そこにあったのは皮を剥がされた息をしていない人間がいた。その時僕は全てを理解した。僕達は体重のメカニズムの研究って言われていたけど、僕達はあの研究所の人達に『飼われて』いたんだ『家畜』として……
僕は何度も何度も「助けてくれ」と人間の肉を冷凍保存している倉庫で叫び続けた。
誰も返事をしてくれる人はいなかった……
僕はあまりの寒さで意識がどんどん薄れていった

高収入アルバイト（後書き）

序盤で『アントロポファジー（株）』と会社名を書きましたが、アントロポファジーとはカニバリズムと同意語です。日本語では食人、人肉嗜食と言います。

友人の葬式（前書き）

※２０１１／８／１８訂正

友人の葬式

僕の友人が交通事故で亡くなって、葬式に呼ばれたので行く事になった。

僕は葬式中悲しくて泣いていた。

まだ中学生の僕にとっては簡単に割り切れる事ではなかった。

お坊さんがお経を読みながら木魚を叩いていた時に

「暗い、暗い、暗いよぉ……」

声が聞こえたような気がした

「暗い、暗い、暗いよぉ……」

間違いなく聞こえた。その声は間違いなく友人の声だ。周りの人は反応していない。僕にしか聞こえていない……

僕は恐くなって席を離れようとしたが

親が「我慢しなさい！」と僕を引き止める

僕も友人の声が聞こえるとは言えないので我慢する事になった

それでも聞こえ続けた

「暗い、暗い、暗いよぉ……」と。

葬式が進んで、僕達は火葬場に向かった

火が燃え上がっている所に友人が入っている棺が入れられた

すると

（熱い！　熱い！　熱いよぉ！）

また友人の声が聞こえてきた。

さすがに今回は恐かった。僕はその場から今度こそは離れようとしたが、また友人の声が聞こえた。

（健司そこにいるんだろ！？　助けてくれよぉ！　ここから出してくれよ！）

友人は僕に助けを求めてきた

僕は驚き、その場から逃げ出した

友人の葬式（後書き）

日本はほとんどの人が死後、火葬されます。火葬される本人は本当にそれを望んでいるのでしょうか？

初ドライブでの（前書き）

※２０１１／８／１８訂正

初ドライブでの

３週間の自動車免許の合宿を終え、自動車免許を取得した。僕は友人を誘いドライブに行く事になった。

「事故んなよぉ～俺まだ結婚もしてないし、まだ人生を謳歌してないから」

コイツは幼稚園の時からの幼馴染であり、僕の数少ない友人である。

「大丈夫だって！　骨はちゃんと拾うからさぁ（笑）」

「コラァ！　死ぬ前提で話すな！」

お互いふざけあいながら夜の田舎道をドライブする。僕はたまたま見えた港に入る船を見た時、友人が大きな声で「ブレーキ！」と言った。

僕は港の船から視線を前に戻すと、目の前に４０代ぐらいの男性と５歳ぐらいの女の子が道路を横断しながらコチラを見つめていた。

僕は慌てて急ブレーキを掛けたが同時に二人を轢いてしまった……

あまりの衝撃にフロントガラスにひびが入った。

車を停めて僕と友人は車を降りた。友人はその二人の首筋に手を当てて、僕の方を見て静かに首を横に振った。

「どうしよう、まだ車の保険にも入ってないのに……俺このまま刑務所かな」

僕は二人の容態よりも自分がこれからどうなるかで頭がいっぱいになった。そんな様子の僕を友人が見て

「この二人埋めるぞ」

錯乱状態の僕は友人の指示に従い、車のトランクに二体の死体を入れた。その後車は友人が運転して、しばらく経つと誰も入らなそうな森に着いた。友人は森に着いてから地面を素手で掘り出した。僕も友人に言われるがまま地面を掘った。深さ１．５メートルの穴を掘って、友人は小さな声で

「ここに埋めるぞ、手伝え」

僕と友人は二体の死体をそこに埋めた。埋め終えたら洋一は僕に向かって
「今日は何も無かった。俺もお前も何も見ていない。分かったな？」
僕はその言葉に静かにうなずいた……
二体の死体を埋め終えた僕達は、何も喋らず帰った。

あの事があった日から僕と洋一は会わなくなった。ただ僕は1年ぐらい、殺してしまったという恐怖と警察に見つかってしまうという恐怖に押し潰されそうになった。
ただ、人間は不思議な生き物である。たとえ人を殺したとしても時間が経てばある程度、罪悪感が薄れていく。

次第に僕は精神的に回復して、日常生活に戻りつつあった。

日常生活に戻って、会社に入り、結婚もして、子供も生まれ、家も買った。
あの日から10年も経った今は、あの日の事も忘れて幸せな生活を送っていたはずだったが、突然自宅に連絡が入った。

それは……

昔の友人が包丁で刺されて死亡したという連絡だった。連絡後、僕は家族を連れて友人の実家の近くの病院に向かった。病院についた僕はナースに案内してもらい、そこには洋一の母親と父親、警官2名。洋一の両親は号泣していて、警官が両親の代わりに僕に説明してくれた。
洋一が何者かに刺され、その後通りかかった人に発見されて病院に

着いた頃にはもう遅かったらしい。警官の説明後、友人の変わり果てた姿を見て僕は泣いた。泣き疲れた僕は嫁と娘と一緒に一旦帰る事にした。

帰り道の途中

車が故障したらしく、道路の脇に車が停まっていて５０代ぐらいの人が助けを求めていたので僕は車を停めて声をかけた。

「大丈夫ですか？」

「いやぁ～ちょっと故障してしまったので、近くの駅まで乗せてくれないですか」

僕はそのお願いに快くＯＫを出して、彼を助手席に乗ってもらうことにした。

「こんな時間にこんな田舎に何か用があったのですか？」

「娘がこの近くで事故に遭いまして……今日はあの日からちょうど１０年経ったので、花束を持って来たのですよ……」

「それはお気の毒に……余計な事を聞いてしまってすいません」

「いや、いいんですよ！あの事故は私達の注意不足だったのですから。ただ、事故を起こした人間が今でものぅのぅと私の目の前で生きているのは許せないですけどね」

『プスッ』

そう言って彼は僕の脇腹を刃物で刺した。

後ろで妻が叫んでいる。

車はガードレールを突き破り、崖から落ちていった……

初ドライブでの（後書き）

あなたは忘れかけている過去の過ちは無いですか？

ゲームを超えて（前書き）

※２０１１／８／１８訂正

ゲームを超えて

モンスターを狩っていくゲームがある。僕はそれだけでは物足りなくなって、ネット通販でエアーガンを改造した物やボウガン、サバイバルナイフなどを購入して近くの森にいる動物達を手当たり次第『狩り』をした。

まるでゲームを楽しむように……

近くの森だけではなく、民家が飼っている犬やペットショップ、動物園にも侵入して『狩り』をした。動物達が僕の手で死んでいくのを見るたびに僕は興奮していった。

今日もいつも通り『狩り』を終え、血まみれの衣服を脱ぎ風呂に入る。そしていつも通りにベッドに横になって目を閉じた。

僕は夢を見た。

今まで『狩り』をした動物達が傷だらけの体で僕を追いかけてくる。僕はただひたすらに逃げる夢。

（気分の悪い夢をみたな……）

僕は何も気にせずにいつも通りに学校に向かった。学校から帰宅をした僕はまた『狩り』に向かう。それから僕は毎日、毎日同じ夢を見た。傷だらけの動物達が僕を追いかけてきて、僕はひたすら逃げる。捕まりそうになった瞬間に僕は夢から覚める。その夢が1ヶ月続いて、また同じ夢を見ていた時だった。

僕は夢の中で初めて動物達に捕まったのだ。

動物達は僕を捕まえると喜びながら僕に攻撃をしていった。まるで『狩り』を楽しむように……

僕の体は噛み付かれたり、食い千切られた。内臓は色々な動物に持ってかれて食べられ、僕の体の残り物は全てカラス達に食べられた。これはただの夢ではない。夢の中なのに痛みがあるのだ。あまりの痛みで叫びたいがのども食い千切られて、叫べない。動物達が僕を食べ終え、僕は夢から覚める。痛みは残っていないがもの凄い量の汗を掻いていた。

その日から僕は毎日、動物達に食べられる夢を見た。
夢の中なのに痛みがあり全て終わるまで夢から覚める事が出来ない、あまりの恐怖に僕は不眠症になった。不眠症になった僕を親が心配して、色々な医者に診てもらったが原因は分からずに、とうとう親は知り合いの紹介で僕を神社に連れていった。神社の人は僕を見て、急いだ様子で他の人に
「今からお祓いをするぞ！　すぐに準備をしろ！」と言った。
その後すぐお祓いが始まり、お祓いが終わって
「もう安心して下さい。悪い霊は祓いました。今日からまた普段通りに生活が出来ますよ」
と言ったので両親は安心したらしく、僕を連れて自宅に帰宅した。
僕も少し体が軽くなった気がして、自分の部屋に入るとベッドに横になって1分もしないうちに爆睡した。

でも

またいつもと同じ

夢を見た

ゲームを超えて（後書き）

動物の恨みを買うような事をしていないですか？

深夜の校内プール（前書き）

※２０１１／８／２４訂正

深夜の校内プール

高校の夏休みに僕を含め友人達3人で深夜に近くの小学校のプールに忍び込んで遊ぶ事になり、深夜2時ぐらいに小学校のフェンスをよじ登り深夜のプールに忍び込んだ。3人ともプールに忍び込んだら、プルーサイドで服を脱いで水着姿になる。友人Aが着替え終えたと同時にプールに飛び込んだ。僕と友人Bも彼に続いてプールに飛び込む。

1時間ぐらい遊んで、僕が「もうそろそろ帰るか?」と言うと友人2人もそれに賛成して、僕達三人はプールから出ようとする。
僕と友人Bがプールから上がる。すると友人Aが騒ぎ出した……
「たたたた、たす、助けてくれぇぇ!」
友人Aが溺れながら、僕達に助けを求めているが僕達が遊んでいた場所は小学校のプール、溺れるような場所では無い。僕はそのとき友人Aの悪ふざけだと思った。友人Bもそう思ったらしく
「つまんねぇから早く上がれよ。帰るぞ!」
友人Bがそう言うにもかかわらず、未だにプールの中にいる友人Aは溺れながら僕達に助けを求めている…
そんな友人Aの姿を見てさすがに僕達二人は友人Aに何かあったのかと思う。満月だった月が雲に隠れていて、溺れているであろう友人Aの姿が薄っすらとしか見えない。僕の隣にいた友人Bは溺れている友人を助けに行くためにプールに飛び込んだ。その時ちょうど雲に隠れていた月が顔を出し、僕達がいるプールに光が射し込む。プールが月明かりに照らされて僕の目に映ったものは友人2人をプールに引きずり込もうとする
複数の手だった……

「こらぁぁぁぁ！　お前ら此処で何をしとるんじゃぁ！」
その声は僕でも友人でもなく、学校にいた警備員。僕は慌ててその警備員に
「友人がプールに溺れているんです！　助けて下さい！」

僕が友人達の方に指を指すと
友人二人はプールにうつぶせの状態で浮かんでいた。警備の人が急いでプールに飛び込み二人を助け出した。警備の人は助け出した後、救急車を呼び、救急車が学校に来て二人を乗せていった。
病院に着いた二人は一命を取り留める事が出来た……
僕は警察や学校や親にこっ酷く怒られたが実際にあった事は話さなかった。

誰も僕の言う事を信じないであろう

「複数の手が友人達を溺れさせた」って

深夜の校内プール（後書き）

プールでの事故って多いですよね

一人暮らし始めました（前書き）

※２０１１／８／２４訂正

一人暮らし始めました

高校を卒業して、両親の反対振り切り地元からかなり離れた東京の大学に進学することになった。当然実家から通う事は出来ないので一人暮らしをすることとなる。

私が一人暮らしすることになったマンションの近くには交番やスーパー、駅もあり立地に関しては申し分無い場所であった。当然、自分の娘が初めて一人暮らしするので親がしっかりとしたセキュリティーがある所を選んでくれたので私自身も安心して暮らせる場所であった。

大学の入学式を終えて自宅でテレビを見ている時

『ザァーーーーザァーーーーー』

と壁越しに何かを引きずるような音がした。少し不気味に思ったのだが、私はそこまで気にしなかった。

そして次も日も、またその次の日も

『ガサ、ガサ、ザァーーーーザァーーーーー』

毎日毎日同じ時刻になると壁越しに物音がした。

引越してから2週間が経ち、私は部屋に絵を飾るために釘を壁に刺す事にした。私はハンマーを持って、思いっきり釘を叩いた。

「ドン、ドン、ドン……」

部屋の壁は思ったよりも薄かったらしく、釘は壁の中に簡単に入っていったのだが

「ギャァァァァァァ！」

と男の声のような叫び声が聞こえて私は腰を抜かした。

私は床に激しく腰を強打して叫び声がした、釘を刺した壁を見た。

釘を刺して、穴が空いた壁からゆっくりと血のような赤黒い液体が流れだした……
私は急いで携帯を取り、親に電話した。私はひたすら「助けて、助けて」と何回も親に言った。
私の親は急いで警察に連絡してくれたらしく、１０分もしない内に私の部屋に警察官が来た。

それから私はショックで大学を辞めて、自宅に暮らすことになった。

しばらくして私が精神的に安定してから親があの事について詳しく教えてくれた。
私が当時住んでいた隣の人は自分の部屋に穴を開けて、部屋と部屋の間を移動しながら私の部屋を盗聴していたらしい……
あの時は私が釘を刺した所にちょうど隣の人がいたらしく、その人の目を私が釘で刺してしまい死亡してしまったらしい。
あの『ザァーーーーザァーーーーー』という物音は彼が部屋と部屋の間を移動している音だった……

それを聞いた私は恐怖に包まれた

一人暮らし始めました（後書き）

あなたも自分の部屋に居る時、物音しませんか？

同窓会に居ない人（前書き）

※２０１１／８／２５訂正

同窓会に居ない人

今日は小学校の同級生達と同窓会。
同窓会は居酒屋を貸切、予定の時間になると一人また一人と小学校時代の同級生達が集まってきて「キャー」とか「久しぶりぃ～」や「元気？」などの同窓会ならではの会話が目立っていた。

今回の同窓会は先生が幹事をしていたので、時間になってから今回の参加者の人数を数えていた今日は小学生の同級生全員が参加することになっていて、参加人数は先生を含めて３０人だった。先生は何度も人数の確認をしたが一人足りず、今この居酒屋にいるのは２９人だ。先生は誰がいないか分からず、教え子達に誰がいないか聞いていたが教え子達も誰がいないか全然分からなかった……

同窓会は盛り上がり、二次会は皆でカラオケに行く事になった。カラオケに移動するために同窓会メンバーは電車で移動する事になった。

駅に着いてから同窓会メンバーはそれぞれ喋りながら電車を待っていた。すると誰かが
「向こうにいる人、ずぅーとこっち睨んでない？」
同窓会メンバーほとんどにその声が聞こえて、反対側のホームに目を向ける。
たしかに反対側のホームには、黒いワンピースを着て長い黒髪の女性が此方を睨んでいた。
ほぼ全員がチラチラと女性を見ているのにもかかわらず、その女性は此方を睨み続けていた。
その時にアナウンスが流れた

「まもなく列車が通過します、黄色い線までお下がり下さい」
アナウンスが流れても女性は此方を睨み続けていた。３００メートルぐらい先に電車が見えてきた時、女性が此方に向かって喋り出した。
「私の事を忘れましたか？」
女性はそう言って通過列車に突っ込んだ。女性の体は列車に轢かれて、体がバラバラになった……
すると女性の首が同窓会メンバー側のホームに飛んできた。
女性の顔を見た時、先生を含めて同窓会メンバーの顔が恐怖で引き攣った。

女性は僕達と同じ小学校の卒業者で
先生と一緒にクラス全員でイジメて不登校になった子だった

同窓会に居ない人（後書き）

思い返して下さい。あなたも過去に傷つけた人がいませんか？

純粋な気持ち（前書き）

※２０１１／８／２５訂正

純粋な気持ち

最近僕に弟が出来た
産まれたばかりの弟は僕と違ってパパに似ている
ママが病院から帰って来た。とってもうれしい！
でもママが帰ってきてから
ママとパパは毎日毎日、弟と一緒にいる
僕は弟にママとパパを取られた
弟がいなくなればママとパパを取り返す事が出来る
僕は自分の枕を弟の顔に押し付けた
しばらくして弟は息をしなくなった
その後ママとパパはそんな弟を見つけて
いっぱい泣いた
僕もママとパパが泣いているのを見て泣いた
でも本当は僕とってもうれしかったんだ
だってこれからはママとパパは

ずっーーーーと僕の物だから

純粋な気持ち（後書き）

子供の純粋な気持ちって、時々怖いものがありますよね

生まれ変わっても親友でいられるよね（前書き）

※２０１１／８／２５訂正

生まれ変わっても親友でいられるよね

私には大好きな親友がいた。小中高と同じ学校。何をするのも常に一緒に行動していたし服や趣味も同じ、悩みなどがあれば親友同士で相談しあったりしてた。私はこれからもずぅーと二人は一緒だと思ったし、親友もそう思っていると思う。私は親友と一緒にいるのが楽しくて幸せで当たり前だと思った。

私と親友が高校三年生に進級した時にそれが崩れるとは全然思わなかった……

高校三年生に進級して初めて私と親友はクラスが別になった。私は初めて別々のクラスになって親友意外の女の子とも仲良くなっていく。親友と接する時間は前より減ったが、私と親友の関係は変わることがなかったはずであった。私は隣の席の男の子と話すうちに、その男の子に惹かれていった。その人は誰にでも優しく接していて、私にも優しく接してくれた。

そんな彼の優しさに日に日に惹かれていく……

そんなある日

彼に放課後呼び出されて「付き合って下さい」と告白されたのだ。彼は私の隣の席になってから私に好意を寄せていたらしい。私も彼の事は好きになっていたので「はい」と返事をした。

親友はそんな私達をあまり祝福はしてくれなかった。

付き合った時は「そうなの、おめでとう」って言ってくれたけど、目ではそう言ってなかった。

（なぜだろう？　なんで親友は一緒に喜んでくれないのだろう？）

と私は思った。

それから私と彼は放課後や休日を一緒に過ごしていた。その時間は始めての彼氏だったので私にとって新鮮で楽しい時間だった。祝福してくれなかった親友とは正直あまり一緒に時間を過ごしたくなかった。付き合ってしばらくしてデート中に彼氏が

「大事な話があるんだ……俺好きな人出来たからお前とは終わりにしたいんだ」

私は思いっきり泣いた。泣いている私に「ごめん」と言って彼氏はデート中に私を置いて帰っていった。突然すぎてどうする事も出来ない私は親友に電話をした。親友は私の話を聞いてくれた。今まで私から親友に対して距離を置いていたのに、そんな私を親友は慰めてくれる。私は申し訳なくて親友に泣きながら謝って、親友もそれを許してくれた。

それから私達は元の関係に戻った。

今日は親友が用があるから先に帰っててと言ったので、私は一人で帰る事になった。

授業が終わり皆帰る準備をしている時に私はお腹が痛くなったので急いで女子トイレに駆け込む……

トイレを済ませて教室に戻ろうとしたら、親友と元彼が廊下で話していた。私は親友に気付かれないようにトイレから二人の様子を覗く。

しばらくすると二人は手を繋いで帰っていった。私はあまりのショックでまともに立っていることが出来なかった。二人の姿が見えなくなって、私の目から大量の涙が溢れた。

元彼の好きな人と言っていたのが親友だった事、ふられた事を知っていながらも私の元彼とそういう関係になっている親友に裏切られた事。悲しかったし、許せなかった。

次の日親友に問い詰めた。
「あなたが最初に私を裏切ったのよ！　親友の私よりも男を選んで浮かれていたくせに！　自業自得よ！」
親友は私にそう言って、どこかに行ってしまった……
私は親友が憎くかった
自分が相手にされなくなったからって、親友である私を裏切るなんて。
仕返ししてやる。大事なものを全て奪ってやる。
『私の頭と心の中が真っ黒になった』
次の日私は元彼を呼び出して、元彼を包丁で刺し殺した。
その後親友の家に行き、親友の家族をみんな刺し殺した。
「ただいまぁ～」
どうやら帰ってきたようだ……
親友は私の血だらけの姿を見て逃げ出そうとした
もちろん逃がさない
彼女を突き飛ばして、包丁を彼女のお腹に刺す

彼女は激痛に顔を歪めながら包丁をお腹から抜き、私に刺した

お互いに意識が薄れていく

あぁー私達生まれ変わったらまた元通り、ずぅーと親友でいられるかなぁ

生まれ変わっても親友でいられるよね（後書き）

女性の友人トラブルって結構重いですよね

主人公はあなた（前書き）

※２０１１／８／２５訂正

主人公はあなた

深夜一時頃あなたはいつものように『小説を読もう』で小説を読み漁りながら煙草に手を伸ばす。煙草の箱を開け、中から煙草を取り出すために指を入れる。だが煙草はさっき吸ったのでどうやら最後のようだった……あなたはしょうがなく煙草を買いに行くために重い腰を上げ、財布を手に取り家を出る。

田舎町の深夜はあまり明かりが無く、とても気味が悪い。
田舎町を照らす明かりは信号のみでほとんどが走行中の自動車に徐行を促すためにある黄色の点滅信号だけだ。その黄色の点滅信号がよけいに道を気味悪くする。
徒歩十分のコンビニにわざわざ車で行く必要性が無いと思ったのだが、不気味な夜道を歩いていくほどあなたは車で行けばよかったと後悔する。

あなたは5分ぐらい歩いていた時に男性の声がした。声につられてあなたは視線を向けた。暗くてはっきりとは見えないが１０ｍぐらい先で男性と女性が抱きあっているようだ。こんな深夜に不謹慎だなぁと思っていてもあなたは視線を外さなかった。お互い体をゆっくりと離し、女性は右手で男性の首筋に何かをした……。すると、男性は首筋に両手を当てながらゆっくりと倒れる。

あなたは男性が倒れたのを見て、急いで二人の下に向かう。女性はあなたの存在に気付いて体をあなたの方に向ける、あなたは女性を見て足を止める。身長は１６０ぐらいで黒のロングヘアー、ジーンズの短パンまではよかった……
血でほぼ真っ赤に染めた白いシャツ、右手に握る包丁と思われる刃物。あなたは殺人事件の目撃者になってしまった。彼女は虚ろな目

であなたを見ながら、此方に歩いてくる。
とっさにあなたは振り返り、全速力で彼女がいない反対方向に向かって走り出す。必死に走りながら後ろの彼女を確認する。彼女はもの凄い形相であなたに向かって走っている。それを見てあなたは体に鞭を入れる。ほんのわずかだが彼女よりはあなたの方が足が速い。

あなたはとある駐車場の車の影に体を隠した。息を殺しながらあなたは彼女が通りすぎるのを待った。
『コツ、コツ、コツ、コツ』
彼女の足音が聞こえた。彼女は歩きながらあなたを探しているようだ。あなたは絶対に彼女に気付かれたくないため、息を止めた。
『コツ、コツ、コツ、コツ』
彼女の足音がだんだん小さくなった。どうやらあなたを完璧に見失っているようだ。あなたは彼女が離れていくのを確認してから、息を止めるのを止め、息を吸って吐き出した。
あなたはこれからどうするのかを考えていた。

「……見〜つけた！」

後ろから声がして、急いで振り向くと彼女は刃物を握った右手を振りかぶっていた。あなたはとっさの判断で彼女に思いっきり体当たりをする。彼女は１ｍぐらい吹き飛び、まだ刃物は握ったままだ。あなたは彼女から刃物を奪い取るという行動を取らずにその場から離れるという行動を取った。
あなたは全速力で彼女から逃げ出した。
自宅のアパートに到着して自分の部屋に駆け込み、鍵を全て閉め、

部屋の明かりを消した。
あなたは自宅に戻れた事で緊張と恐怖から解放され、力が抜けて座り込んだ。
３０秒ぐらいしてようやく思考も回復したのか携帯を手に取り、警察に連絡する事にした。
あなたは震えた手で１、１、０と打ち込み、最後に通話ボタンを押そうとした時に
『コツ、コツ、コツ、コツ、』
玄関越しに足音が聞こえる。
１００％とは言い切れないないが彼女の足音だろう。
あなたは無性に誰か確認したくなり、携帯を静かに床に置き玄関の覗き窓に目を近づける。
『コツ、コツ、コツ、コツ、』
長は１６０ぐらいで黒のロングヘアー、ジーンズの短パン。そして血でほぼ真っ赤に染めた白いシャツ、右手に握る包丁と思われる刃物。
（……彼女だ！）

だが、あなたの部屋は知らないようでウロウロしている。しばらくすると彼女の足音も小さくなり、完全に気配が無くなった。どうやら諦めてくれたようだ……あなたは安心して携帯を手にして警察に連絡した。あなたは警察に必死で説明しながら、ふと思った。

（彼女はいったいどこに向かったのか……？）と

小説がここで終わってしまっている。
あなたはオチの無い小説を見たことに怒りを覚えた。
あなたは気付いた
この小説がまだ続いている事に
あなたはゆっくりとページの下にスクロールする。

彼女の行方、気になりませんか？

主人公はあなた（後書き）

こういう話を見てから後ろって見たくないですよね……

あなたは振り向く勇気はありますか

睡眠時遊行症（前書き）

※２０１１／８／２５訂正

睡眠時遊行症

僕は不思議な体験をする。

朝起きると僕の足の裏が真っ黒で、体のどこかには必ず小さな切り傷があり、パジャマには血痕がついている。そういう体験をするようになったのは高校を入学してからで、今日が3回目の体験であった。1回ぐらいならすぐに忘れそうなのだが、さすがに3回もなると怖くて仕方が無い。僕は親に相談して医者に見てもらうことにした。

病院に行き医者に診断してもらった結果、僕は睡眠時遊行症（すいみんじゆうこうしょう）だと診断された、俗に言う夢遊病だ。医者の説明での原因は興奮状態で睡眠したり精神的なストレスが多いとされているが、はっきりとした原因が分からない症状で、一応薬物治療が出来るらしい……
僕は医者から薬をもらい、しばらくは様子を見てくださいと言われたので様子を見ることにした。だが僕の病気は治る事は無かった。

ある日僕の家に大学の先生が来た。
僕の親の知り合いで深夜、カメラで僕の事を色々調べたいと言うのだ。僕は始めは反対だったが、調べる事により治す方法が見つかるかもしれないと言われて渋々了承した。カメラの設置はトイレと風呂、親の寝室以外に計２０個設置する事になった。しばらくして大学に呼ばれて僕と親は大学に向かった。
大学の先生は「コレを見てください」と言ってビデオを再生した。
（……僕の家だ）

そこに映っていた映像は僕が深夜にベッドの下から包丁を持って、外に出て行く映像だった。

僕は怖くなった。
包丁をあんな所に隠していた事なんて見覚えが無い。僕が朝パジャマについていた血痕は、包丁の件を考えたら恐ろしかった……
もしかして僕は深夜に誰かを殺しているのではないかと思って先生に確認した。
先生は分からないので僕のパジャマと包丁についている血痕の血液検査をすると言った。その日の夕方、先生に血痕がついた服や包丁を渡した。先生は「明日には分かるので明日連絡します」と言われ、僕達家族は家に帰った。

もう時間も遅くなって、家族で食の進まない夕飯を食べて寝た。

次の日、僕が起床した時に異変に気がついた。パジャマが血痕だらけで、部屋が誰かに漁られたようにぐちゃぐちゃに荒らされていた。
僕は急いで自分の部屋の異常を親に見てもらおうと親のもとに向かう。

階段を降りて僕は一瞬で固まる。

父と母が血だらけで床に倒れていたのだ……

その後の記憶は覚えていない。気が付いたら病院のベッドの上にいた。
あの後、大学の先生が家に血液鑑定を知らせるために家に来て僕達を発見したというのである。
それから僕はこの病院に連れて行かれたらしい……
しばらくして裁判をする事になり、僕が親を殺したのが分かった。

検察側の証拠で出したのは家に取り付けてあるビデオカメラ。
僕が深夜に起きて包丁を探して部屋中を漁り、一階に降りて僕が外に出ようとしたら親が止めようとして僕がキッチンにある包丁で刺し殺した映像がのこっていた。
病院の先生や大学の先生などの証言で無罪となったが、僕はどうでもよかった

僕に残されたのは自分の手で人を殺してしまった『現実』だけだから

１０年たっても病気は治らず
僕は今でも精神病棟の鍵を閉められた一室で夜な夜な睡眠時遊行症を繰り返していた

睡眠時遊行症（後書き）

夢遊病の症状が出ている人を見つけても、止めようとしたり起こそうとしたりしてはいけないです。過去に止めようとした親が殺されたという実話があるので……

路上生活者の過ち（前書き）

※２０１１／８／２５訂正

路上生活者の過ち

会社をリストラされ、女房には捨てられ、働く気も失せて貯金も無くなり路上生活。さすが１０年もこういう生活をすれば慣れる。私がまだホームレスになったばかりの時はどうやって生活したらいいか分からずに盗みばかりしていた。
私が路頭に迷うようになったばかりの頃は稼ぎ方も分からず食事もまともに取れず、お腹が空き過ぎて公園の水で空腹を満たすのは当たり前、それでも空腹を満たせない場合は公園にある雑草を食べる時だってあった。そんな時に無い知恵で思いついたのは、お墓に供えてある食べ物を拝借する事だった。
幽霊とか祟りなんか気にしてられなかった。その時の私は死ぬか生きるかの瀬戸際だったからしょうがないと思っていた。毎日お墓を回りながら供え物の食べ物やお酒、煙草などを盗む事でなんとか生活をする事が出来た。

今日も日課の盗みが終わり、いつものようにダンボールとビニールシートで作った家で寝始めようとしていた時に
「わしのじゃ」
家の外から声が聞こえた。私の家は公園内に設置しているので声が聞こえるのは当たり前なのだが、今日はいつもと違った。こんな深夜に年寄りの声が聞こえるのもおかしいが、私の家に向かって言っているようだった。
「かえせ、わしのじゃ」
また声が聞こえた。私はビニールシートを捲って外の声の主を確認する。
暗闇に立っていたのは一人の老婆。微かな月明かりだったので老婆の姿を目を凝らして見た。老婆はボロボロの布を纏っていたのは分かったが、顔は前髪で隠れてよく見えない。仲間かと思ったがとり

あえず今は、私が寝るのに邪魔だったので何処かに行ってもらう事にした。
「すいません、何の話ですか。時間も遅いので何処か行ってもらえますか」
「かえせ、わしのじゃ」
私が何を言ってもそれしか言わない。さすがに手を出すのは出来なかったので、私は家から出て自転車で違う町の墓場に行く事にした。
戻ってきた時にはあの婆さんはいなくなるだろうと思っていた。

公園に帰ってきて、時計台を見ると時刻は深夜４時３０分。少し明るい。
家に帰る前に少し離れた場所から、老婆がいるかどうかを確認した。もしいたら今度は力ずくでも何処かに行ってもらおうと思いながらも確認をしたが居なかった。
どうやら何処かに行ってくれたらしい、私は安心して家の中に入り拾ってきた毛布で体を包んだ。
「かえせ、わしのじゃ」
眠気で意識がどんどん薄れていく時、また老婆の声がした。
私は頭にきてビニールシートに手をかけようとした時……
「かえせ、わしのじゃ」「盗った物を差し出せ」「罰当たりが呪ってやる」「末代まで祟ってやる」「盗った物を差し出せ」「絶対に逃がすものか」「罰当たりが呪ってやる」「かえせ、わしのじゃ」「盗った物を差し出せ」「罰当たりが呪ってやる」「末代まで祟ってやる」「絶対に逃がすものか」「かえせ、わしのじゃ」「盗った物を差し出せ」「罰当たりが呪ってやる」「末代まで祟ってやる」「絶対に逃がすものか」
今度は一人では無く、複数の人々がいる。彼らが言っている事に私は心当たりがあった。
私は恐怖で震える手でゆっくりとビニールシートを捲った。そこにいるのは人、人、人、人、人、数えきれない人。小さな公園が人でいっぱいになっていた。

ただの人ではない。今まで私が盗んできた墓の住人達だった。その事に気がついた私はショックで意識を失った。

しばらくすると、私は意識を戻した。

私はもう供え物には手を出す事を辞めた。

今では空缶や鉄くずを集めてお金に換えて生活を過ごす日常。

ただ

いまだに彼らは深夜、私の所に来て供え物を返してもらおうとする。

「かえせ、わしのじゃ」

路上生活者の過ち（後書き）

自業自得で罰当りな話ですが、今現在こういった人はいるんですよねぇ～

Schatten（前書き）

※2011／8／25訂正

Schatten

影とは物体や人などが、光の進行を遮る結果、壁や地面できる暗い領域である。これは一般論であり常識である。

バーでバイトをする事になり、帰宅をするのは当然深夜。バイトが終わりいつも通り鞄を片手に帰宅をする。しばらく歩いて、横断歩道で信号待ちをしている時……

一瞬、自分の影が僕と違う動きをしていたように見えた。あまりにも微妙なので勘違いだと思った僕は右手を上げてみる。影も僕の動きと同時に片手を上げる。

やっぱり勘違いでは無かった。

影は僕の片手と反対の手を上げている。

横断歩道の信号が青になったが僕は一歩も足を動かす事が出来ずに立ち竦んでいる。影も僕と同じく立ち竦んでいた。どうする事も出来ない僕はとりあえず歩いてみた、影も僕と同じく歩き出す。

横断歩道を歩いている途中で突然影が激しく動き出した。

しばらく見ていると影は僕に対して何かを伝えようとしているように見えた。

影は両手を僕に向けて『止まれ』の合図を出しているようだ。

そんな影を僕は立ち止まり見ていると

「ブッーーー！　キキッーーーーー！」

僕が後ろを振り返ると光に包まれ、気が付くと僕は宙を舞っていた

……

僕は地面に落ち、僕の視線の先にはトラックから人が降りて僕の方に向かってくるのと

僕の影が踊り狂っているのが見えた。まるで喜んでいるかのように踊り狂っていた。

僕はそれを見て、意識を落とした。

Schatten（後書き）

影は影でいることが嫌だったんでしょうか……

中古家具　ベッド（前書き）

※２０１１／８／２５訂正

中古家具　ベッド

中古家具店でクイーンサイズのベッドを購入してから、毎日のように悪夢に悩まされる。暗闇の中で僕が誰かに追われているかのように逃げる。ただひたすら走り、がむしゃらに走る。追ってくるものは何かは分からないのに、怯えながら逃げる。ひたすら走っている途中で跳ね上がるように起きる。太股、背中、胸、首筋、顔面が汗だらけでまるで本当に走った後のように汗で体を濡らしている。こんなことを毎日のように続けていれば当然寝れなくなる。

ある日会社から3ヶ月の出張命令が出て、僕は大阪に3ヶ月出張した。

主張先では毎日悪夢に悩まされる事は無かった。出張業務が終わる時には悪夢の事なんて頭に残っていなかった。

自宅に戻り一人で晩酌して少し酔っ払い、そのままベッドに倒れこむ。

……いつもと同じ夢だ

僕はいつもと同じように何かに追いかけられる、だが今日は何かに掴まれて

「寂しかった」と言われた所で目が覚める。

（あれ？　体が動かない、金縛りか？）

いや、違う。これは金縛りではない。

体は微妙に動かせる。僕は首だけを起こして体を確認すると、ベッドから手と足が出て僕の体と固定している。それを見た時、左側に何か気配がした。

僕は恐る恐る首をゆくっり左に回す。

女性の顔の半分だけがベッドをすり抜け僕を見つめている。僕はそれを見て声を上げようとしたが、あまりの恐怖に声が出ない。しばらくすると女性はまだすり抜けていない部分の顔を全部出し切って、僕に

「寂しかった」

それから2週間の時が経ち、アパートの大家が部屋のベッドで死んでいる男を発見した。男は過労死として扱われ、その男の両親が遺品を整理する時に家具はまとめて売り払った。

そう、あのベッドは今でもどこかの中古家具店で販売されている

中古家具　ベッド（後書き）

中古の家具を使ってはいないですか？　人の魂は物にも宿るって言われています。

虐められっ子の願い　壱（前書き）

※２０１１／８／２５訂正

虐められっ子の願い　壱

僕は苛められている。眼鏡をかけて太っているだけ、たったそれだけで虐められ続けられていた。同級生の男子は僕の事を毎日「ブタ眼鏡」と罵りながら殴る蹴る、周りの人も見てみぬふり。

僕は恨んで、憎んで、そして呪った。

毎日殴られながらも心の中で「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね」とずぅーと叫び続けた。そんなある日僕を苛めていた一人が通り魔に刺されて死亡したと先生から報告があった。僕以外のクラスメイトは皆泣いている。僕は正直嬉しかった。ずっと死んで欲しいと思っていたやつがやっと死んでくれたから、思わず顔が綻んでしまう。休み時間になって僕は苛めてくる男子達に呼び出されて、僕がさっきの先生の話の途中で笑っていた事がばれてまた彼らに殴られる。僕はまた心の中で「こいつらもアイツのように死んでくれ」と強く、強く願った。

僕の願いが通じたのか、一人また一人と僕のクラスメイトが減っていく。その度に僕は喜ぶ。

クラスメイト達は次は誰が居なくなってしまうのか怯えていて、皆自分の事で頭がいっぱいになり僕の虐めは無くなってきた。

ある日の休日、僕の自宅に警察が二人来た。僕の親が必死で僕を連れて行こうとする警察を止めようとしたが僕は「すぐに帰ってくるから」と言って親を止め、車に乗り込み警察署に向かう。

あぁこうなる事は分かっていた。

あいつらを殺したのは僕。あいつらの死ぬ間際の顔、次は自分の番

が来るかもしれないと怯える顔、それらを見るたびに僕は興奮しまた殺しに行く。だが、まだ殺し足りない。この警官達は邪魔だ。
僕はナイフをポケットから取り出し二人を殺す。

警官二人から拳銃を奪い取り、学校に向かった。まだ終えていない続きをするために

虐められっ子の願い　壱（後書き）

今でも何処かで虐められている人がいて、彼のような行動をとるかもしれないですね

家族の一員（前書き）

９／２０訂正終了。

家族の一員

私の家には父、母、私、犬の４人の家族がいた。

私が幼稚園に入園したばかりの時は本当は皆と遊びたかったけど、人見知りなせいで私は全然友達が出来なかった。家の隣の公園には毎日自分と同い年の子達の遊び声が聞こえる。私の父はそんな私を見かねて犬を買ってきてくれた。毛並みが黒いので名前は『クロ』。友達がいない私は毎日毎日『クロ』と散歩したり、公園で遊んだりした。遊ぶ時も寝る時もいつも私のそばに『クロ』がいた。私とクロの関係は飼い主とペットの関係ではなくて、友人……いや、それ以上の関係であった。

小学生に入学してから『クロ』に興味を持った同い年の子が私に話しかけてくれて、私に初めて人の友達が出来た。『クロ』と一緒に過ごす時間は少しずつ減っていったけど、『クロ』には感謝していた。『クロ』がいなければ私に友達が出来なかったと思うから……。

小学四年生の夏、私の家に黒い服を着た男の人達がたくさんの段ボールを持って押しかけてきた。その日からしばらくして黒い服を着た人にパパが連れて行かれた。ママは泣き叫び私は理由も分からず必死でママを慰める、『クロ』は男の人達が居なくなるまで吠えていた。

そこから毎日が地獄のような生活だった――今まで友達と思っていた子は私と遊ばなくなり、家には『死ね！』『出て行け！』などの落書きを書かれ、近所の人や商店街の人に数多くの嫌がらせを受ける日々。――ある日学校から帰ると普段はあまり吠えない『クロ』が犬小屋から家の中に向かって吠えていた。私は何かあったと思い、

家に急いで入る。
『マ……ママ？』
ママは首に紐を巻きつけて、天井からぶら下がっていた。
ママは自分で命を絶った……

育ててくれる人がいなくなった私は施設に預けられることになった。
施設の人は私に『クロ』は飼えないと言ったので、私は必死に抵抗したが叶う事はなかった。施設に行く事になった当日、私は施設に行く前に『クロ』に別れを告げる事にした。
いつも遊んでいたはずの公園に行って『クロ』に泣きながら
「もうクロとは一緒に住む事が出来なくなったの、ごめんね……」
私は『クロ』から離れようとしたけど、私についてこようとする。
私は泣きながら大きな声で
「クロ！　お座り！　待て！」
この二つはクロの得意の技だ。まさかこんな時に使うことになるとは思わなかった。
『クロ』は座って、舌を出しながら尻尾を振っている……
私はもの凄い罪悪感に襲われた。涙が止まらず「ごめんなさい」と一言言ってその場から離れる。

一週間後私は施設を飛び出して『クロ』に会いに行った。
三人を捨てた父。二人を捨てた母。一人を捨てた私。私には出来なかった……。
家族も同然だった『クロ』を捨てることなんて。

私はあの公園に着き『クロ』を見つけた。体は痩せすぎて骨と皮だけになっていてかなり弱っている状態だった。そんな姿になりながらも私の待てという指示に従っていたのだ。私は涙を流しながら「ごめんね、ごめんね……」と『クロ』の頭を撫でた。『クロ』は少しだけ尻尾を振って目を閉じ、動きを止めた――

それから私は中高と卒業、就職もした。年齢も３４歳になり、今では１０歳年下の彼氏もいてもちろん将来も考えている。
そんなある日彼からプロポーズされた。私の返事は当然ＯＫ。プロポーズ後、彼が行きたい所があると言って私を助手席に乗せた。目的地に着いて彼が私に
「俺さぁ、前に捨てられたんだよね……今度は捨てないよね？」
そこは公園だった

家族の一員（後書き）

日ごろあなたはペットに対してどう接していますか？

タイムカプセル「３０歳の私へ」（前書き）

※９／２０訂正。

タイムカプセル「30歳の私へ」

今日は小学校の同級生達との同窓会。小学校の卒業式に埋めたタイムカプセルを開ける日でもある。

同級生達と久々に会って、お酒を飲みながら「あの時は～」などの昔話を楽しんだ。その後、学校に行きいよいよタイムカプセルを掘り起こした。小学時代の先生が教え子達一人一人に未来の自分に宛てた手紙を渡していく。私も未来の自分に宛てた手紙を貰い、その手紙を見る。

「30歳の私へ（1枚目）

私は元気にしていますか？

私は高校も大学も結構いい所に行けたよね？

大学を卒業してから弁護士になって、お仕事忙しいよね？

28歳になって将来を考えれる彼氏が出来たよね？

でも、その彼氏と結婚してはいけないよ！

だって……　　2枚目に続く」

私は驚いた。将来の夢であった弁護士までは当たってもそこまで驚かなかったが、28歳の件に関しては小学六年生では予想がつかないと思う。しかも当たっている。

そして結婚してはいけない？　なんで？　私は恐る恐る二枚目の手

紙を見る……

「３０歳の私へ（２枚目）

さっきの続きが気になる？

本当に知りたい？

しょうがないなぁ～教えてあげる

今付き合ってる彼氏ね、いっぱ～～～～～～い

人　殺　し　て　る　の

だから結婚しないほうがいいよ

あと約束して欲しいの

別れるなんて絶対に言っちゃいけないよ

そんな事を言ったら彼が私を殺しちゃうから

約束だよ！」

ここで手紙は終わっている。正直気味悪かったがあまり気にしない

ようにした。

元同級生達と別れてから、私は自宅のアパートに向かった。鍵を開けるとそこには料理をしている男性がいた。もちろん私の彼氏でとっても優しく結婚も考えている。

私は着替えながら冗談ぽく彼氏にタイムカプセルの事を話した。

「今日ねぇ、同窓会で小学校卒業の時に埋めたタイムカプセルを掘ったんだよ。それでね、私が書いた『３０歳の私へ』ていう手紙に面白い事書いてあったんだ～。今付き合っている彼氏はいっぱい人を殺しているから結婚してはダメなんだって。笑えるよねぇ」

「何で分かった！？　調べたのか？」

彼が私の背中越しに低い声で問う。でも、私は声を出す事が出来ない。

部屋中が私の首から流れた血で真っ赤に染まっていった。

タイムカプセル「30歳の私へ」（後書き）

あなたはタイムカプセルに何を入れましたか？　……手紙ですか？

オアシスを求めて（前書き）

※9／21訂正

オアシスを求めて

歩いても、歩いても砂と岩しかない。
あまりの暑さに無意識に中身の無いペットボトルを口につけ、ペットボトルを傾ける。
僕このままだと死ぬのかな……

今回の旅行は失敗した。レンタカーを借りて約一〇〇〇万k？ある
サハラ砂漠の様々な町を回りながら観光を楽しむはずであったが、
途中で車が故障し今に至る。しばらく歩けばどこかの町に辿り着く
はずと思っていたが自分の考えは甘くかった。いつまで経っても町
や人を見つけることが出来ない、完璧に遭難していた。
砂漠で遭難してから一週間経ち、手持ちの水は2日前に切れた。意
識は朦朧として、無い力を出して右左右左と足を動かしていた。
自分の死をある程度覚悟している時、約１００M先に見つけた……
オアシスだ。
僕は無い力を振り絞り走った――

それから2日後近くを通った遊牧民に発見され、日本に帰国するこ
とになった。某有名企業の社長ということもあり大々的に記者会見
をして、様々なニュースや雑誌に取り上げられた。
会見後自宅に帰宅して、時間も遅かったためベッドに横になった。

翌朝あまりの暑さに寝苦しくて起きた。真夏にクーラーも点けずに
寝てしまったためだろう。
体を起こして冷蔵庫に向かいミネラルウォーター手に取り、飲む
「ゴホッ！　ゴホッ！」
僕が飲んでいた水が砂になっていた。驚いてペットボトルを落とす
と、さっきまで砂だったのが水に戻っていた。

たぶんあんなことがあったので、疲れて幻覚を見てしまったのであろう……

とりあえず床にこぼした水を雑巾で拭き、シャワーを浴びるために風呂場に行く。お湯を溜めるために蛇口を捻り、お湯が溜まる間に体を洗う。そして全身泡だらけの体を洗い流すためにシャワーを出した時。

ザーーーと出てきたのは水ではなく砂、砂、大量の砂。慌ててシャワーを止め、視線を湯船に向けるとそこに溜まっていたものはやはり『砂』であった。そして、周りにある物全てが砂に変わっていく――

そこで目が覚めた

今寝転んでいる所はさっきまでいた砂漠であった

「ゆ……め……か……」

オアシスを求めて（後書き）

今のあなたはまだ夢の中かも知れないですね

同棲生活『彼女との日常』（前書き）

※９／２１訂正

同棲生活『彼女との日常』

「おはよう、今からご飯作るね」
僕が彼女と同棲してもうしばらく経つ。誰よりも美しく、誰よりも素敵で、誰よりも完璧な彼女。
「今日は残業で遅くなるから外で食べてくるね。行って来ます！」
家を出る前に彼女と口づけを交わし、彼女との別れを惜しみながらも会社に向かった。

やっと仕事が終わって、帰宅する。
「ただいま、まだご飯食べてないの？」
彼女は一切返事をしないが、そのままソファーに座り込む。
「今日会社でさぁ――」
テレビを見ながら、彼女に今日の出来事を楽しく話す僕。
「一緒にお風呂入ろっか？」
僕は彼女を抱きかかえて、風呂場に行く。
「はぁ～気持ちいいね、今日は気分がいいから頭洗ってあげる」
シャンプーを彼女の頭につけて泡立てる。お湯で頭を流してあげてお風呂を出た。

お互い髪を乾かして、ベッドに入る。
「おやすみ、愛しているよ」
毎日必ず交わしているおやすみの口づけをし、彼女を抱きしめ瞼を閉じた……

『ピンポーン』
「は～い！　どなたですか？」
「〇〇だな。殺人罪の容疑で逮捕する、逮捕状もある」
僕は彼女に「大丈夫だ、心配しなくていいから」と言って、手錠を

かけられたまま警察の人と一緒に部屋を出る。

彼女を一人っきりにしてしまった。

彼女は家事が全然出来ないけど大丈夫なのだろうか……

首から下が無い彼女は静かに此方を見つめていた

同棲生活『彼女との日常』（後書き）

あなたの恋人はあなたに対して異常な愛情を持っていませんか？

虐められっ子の願い　弐（前書き）

※9／21訂正

虐められっ子の願い　弐

彼の外見は低身長、デブ、眼鏡。中身は人見知りで協調性がなく、いつもクラスの隅で読書を嗜んでいる。クラスで騒ぎまわっている男子グループからしてみれば、虐めの標的の的になるのは想像がつくと思う。当然彼は私の隣で虐められている。

真面目で学級委員長という立場の私はいつも彼らの虐めを止める。

「先生のに言いますよ！」と言えば彼らはつまらなそうな顔をして何処かに行ってしまう。

本当は私はこの役はあまり好いていない。なぜなら、私も虐めの標的になりたくないという思いと彼の態度だ。

彼は虐められているのに抵抗をしず、助けも求めない。暴力や恐喝など非人道的な行為をいくらされても絶対に抵抗をしない。そんな彼を私は好きにはなれなかった。

しばらくしてからこの虐めがクラスで問題になり授業一時間分の時間を使って話し合う事になった。私が先生に今のクラスの現状を伝えて、話し合うように提案したのだ。

先生を含めクラス全員で話あった結果、要約すると虐めを止めようという方向になったのだが……

時間が経てばクラスメイトは話し合いの事を忘れ、また虐めだした。学級委員長という立場である私は毎日のように彼に対する虐めを止める。虐めを止める度に彼に対して怒りという感情が大きくなっていった。

『何で、抵抗しようとしないのかと――』

私は彼を呼び出して、思いの丈を全てぶつけた。すると彼は小さな声で

「気持ちいいから……だからもう止めなくていい、正直迷惑で邪魔」

と。

私は彼が言っていることを理解する事が出来なかった。彼の事が気味悪くなって、彼に何も言わず早々とその場を離れた。
そんな事があっても毎日私は彼に対する虐めを止めようとした。

ある日学校に行き、上履きに履き替えるために下駄箱を開けるとそこには虫の屍骸でいっぱいになっていた……。
あまりの出来事に唖然としていたら、後ろに気配がした。後ろを振り向くとそこには虐められていたあの彼がいた。彼はにんまりしながら口を開けた。
「仲間入りだね。これから気持ちいい毎日が委員長を待ってるよ、すぐに分かるさ」
彼はにやにやしながらその場を離れていった。

虐められっ子の願い　弐（後書き）

虐められっ子＝不幸、可哀相ではなく、虐められっ子＝興奮、快感っていう人もいるかもしれないですね。

今日のあなた（前書き）

9／21訂正

今日のあなた

今朝、宛名の無いメールが携帯に一通届いた。それは題名に「今日のあなた」と書いてあるメールで、本文には僕に起きる今日一日の出来事が事細かに書かれている。スパムメールだと思っていたのだが、中身を確認すると僕が何時に起きて何時に寝るとか、何時に先生に居眠りを注意されるだとか、今日僕の身に起きるであろう出来事が本当に細かく書いてあった。気味が悪いのだが僕は気にすることをやめて、学校に向かうことにした。

授業中僕は先生に居眠りを注意されて、僕はあの一通の宛名の無いメール「今日のあなた」を思い出した。休憩時間になってすぐに携帯を確認したら、あのメールの内容が完璧に当たっていたのだ……

『〇〇時〇〇分授業中居眠りをしている最中に先生に殴られて注意を受ける』

僕は気味が悪くなり、急いでアドレスを変更した。

翌日携帯を開くと待ち受け画面に『新着メール　1件』と表示されていた。まだ誰にも教えていないはずのメールアドレスにメールが届いている。

僕は恐る恐る新着メールを開くとそこには宛名の無いメールそして題名には「今日のあなた」と。

僕は怖くなって携帯の電源を落とした。少し時間が経ち僕はやっと冷静になってきた時、ある事を思いついた。このメールを有効活用出来ないかと……

それから僕の日常が大きく変化した。一日に起こりうるあらゆる事を教えてくれるメールのおかげで、僕に起こる不幸を回避できるようになったのだ。僕は漫画の主人公になったかのように一日一日を

謳歌していた。

それから三ヶ月したある日
朝起きて、日課の新着メールのチェックをする。もちろんそこには
「今日のあなた」と題名に書いてある宛名の無いメールが一通。

『０６時００分　起床
０６時０５分　メールを確認
０６時０６分　パソコンでくも膜下出血を調べる
０６時１５分　くも膜下出血により頭痛が始まる
０６時３０分　呼吸が止まり死亡』

（死亡……！？）
僕は急いでパソコンの電源を点け、『くも膜下出血』を調べる。パソコンには
《くも膜下出血「症状」→くも膜下出血の特徴は強い頭痛です。突然いままでに経験したことのないような頭痛が始まります。これに先だって、がくんと脱力発作を起こすこともあります。痛みは始まると朝も晩も同じ強さで続きます。
多くの場合にはただちに意識障害が進行し、１時間以内に呼吸がとまることもあります――》

（嘘だ……。）僕はまだ十代なのにこんな病気で死んでしまう事が信じられなかった。
ただ、この「今日のあなた」と書かれたメールの内容は一度も外れたことがなかった。
ベッドに置いてあるデジタル時計を見るともう時刻は０６時１４分４１秒……
４２、４３、４４、４５とデジタル時計の秒数が進んでいく。
まるで僕の死のカウントダウンをしているかのように――

55、56、57、58、59……

今日のあなた（後書き）

あなたにも届くかもしれないですね『今日のあなた』が

私には見えるの　壱（前書き）

※9／21訂正

私には見えるの　壱

初めて見えるようになったのは高校三年生の夏――

高校三年生の夏はこれからの人生の岐路を選ぶもっとも重要な時期で、私も他の高校生達と同じく将来について色々と悩んでいるような普通な女子高生だった。あれこれ考えているうちに夏休みに入って、気晴らしに男子を含む友人達と近くのプールに遊ぶ事になった。

プールで遊び終えた私達は男子の提案で近くの廃校に肝試しに行く事にした。廃校の中はまだ昼間にも関わらず薄暗い、私も一応女の子という立場から「コワ～イ」など言って他の女子達にまざって怖がった振りをしていた。正直私は幽霊みたいな非科学的な存在を信じていない、なのでこういう場所に来ても何が面白いのかと醒めていた。

しばらく皆と歩いていたら少し離れた教室の前に白い服を着ている女の人が立っていた。私は驚き、友人達に「あの人誰？」と聞いたが他の人達は「何が？」とか「怖がらせるなよ～！」だとか言われて、私は逆に友人達が私を脅かそうとしているのかと思っていたがその女の人にどんどん近づいているのに友人達は本当に見えていない事が分かった。私にだけしか見えてない……

そんな事を考えていたら、その女の人と目が合った。

女の人は私と目を合わせると私達に対して睨むように目を細め、ゆっくりと口を開け、そして音の無い声を出した。私は恐怖で体を固め、その女の人を見ることしか出来なかった。その女の人が何て言っているか聞こえないのだが、その女の人を見続けていた私は口の動きで何を言っているのか分かった……

「こ　こ　に　は　は　い　る　な」

結局、私の顔色が悪いのを心配してくれた友人が肝試しを中断してくれたためその教室に入ること無く帰宅する事になった。
あの教室には何があるのか？　そしてあの女の人は誰なのか？　今でも分からない。

そしてあの日から私には死後彷徨える者達が見えるようになってしまった。

私には見えるの　壱（後書き）

口パクで喋る幽霊って想像したら怖くないですか

理科室の噂（前書き）

※9／21訂正

理科室の噂

最近、僕の中学校で殺人事件が起きた――

殺人事件後一週間休校となってから今日は久々の登校日。教室に入ると、誰もがあの殺人事件の事を話している。そんな様子を席に座りながら眺めていたら、友人が僕の隣に座った。

「まだ先生を殺した犯人が捕まってないんだって」

友人の言う通りまだあの殺人事件の犯人は捕まっていない……

「俺の親父の知り合いが警察で働いててさぁ、その人が言うには不可解な事が多すぎて全然捜査が進んでないらしいよ」

「不可解な事って？」

「しらねぇ～、そこまで詳しくは教えてくれなかった。あっ！　人体模型が血塗れだったらしいよ」

「どこの学校の怪談だよ！」

友人に軽くツッコミをして、チャイムが鳴る。

学校では先生達もあの殺人事件についてはあまり触れず、「帰宅する時は必ず二人以上で帰るように」とＨＲで注意を受け、皆自宅に帰宅した。

久々の登校から1ヶ月するとある噂が学校を賑わせていた。

『理科室の人体模型が先生を殺した』

噂が回れば回るほど、どんどん悪化していく――

深夜2時を回ると理科室の人体模型が動き出すだの、太陽が沈むと人体模型が喋りだすだの……本当にくだらないのだが、好奇心旺盛な友人は違った。

「今日の深夜、噂を確かめる為に学校に忍び込まねぇ？」
「嫌だよ、めんどくさい」
「お前も気になんねぇ？　学校の噂」
この後、押しの弱い僕は友人の誘いを断れず渋々了承することになった。

そして深夜――
「深夜の学校ってテンション上がるよな！」
たしかに友人が言っているように僕も中学男子のはしくれ、少しテンションが上がっていた。
そうして僕達二人はいつも鍵が開いている裏口から学校に侵入した。学校の外は外灯が少しあり多少周りの景色が見えていたが、深夜の学校は日本中で流行っている節電の影響を受けて豆電球すらついていない。なので校舎の中は月明かりでぼんやりと見える程度だ。僕と友人は懐中電灯のスイッチをオンにして学校の廊下に光を射しながら廊下を進んでいった。

しばらく歩いて、やっと目的の場所に着いた。
理科室の扉には『立ち入り禁止』と黒文字で書かれている白い画用紙が貼られていた。すると友人がポケットから鍵を取り出した。
「今日の放課後に職員室から借りてきた、開けるぞ」
「借りてきたって……盗んできたの間違いだろ！」
僕のツッコミを無視して、友人が立ち入り禁止の扉を開けた。理科室を懐中電灯で灯すとそこにはよく刑事ドラマとかで見る死体の跡にそって置かれている白い紐や証拠品の場所を指す番号が書いてある看板などは無く、綺麗に掃除されていた理科室であった。
「おいっ！　人体模型あったぞ！」
友人が人体模型に近づいていく。そこには以前からある理科室の人体模型であった。友人は懐中電灯の光を人体模型の顔に当てながら、動かない人体模型に対して

「つまんね～な！　動けよ！」
「もういいだろ、帰ろうぜ」
僕達は踵を返して理科室を出ようとした時、友人が隣にいない事に気がつき後ろに振り向いて懐中電灯の光を友人の足からゆっくりと上にあげるとそこには目が虚ろな友人が体を痙攣させながら立っていた。光の先を友人から少しずらすと友人の首に噛みついている人体模型がいた……
足が竦んで僕は一歩も動く事が出来なくて、友人が力尽きていく姿を見ることしか出来なかった。人体模型はまるで食事を楽しんでいるように友人のいろんな部分の肉を食べている。

まるで“自分に足りない部分”を補うかのように

食事に満足したのか、友人を食べ終えた人体模型は自分の元にあった場所に戻り動かなくなった。
全然動けなかった僕の足はやっと動いたかと思うと一気にお腹にあるものを全て吐き出した。なんとか落ち着いた僕は懐中電灯の光に頼りながら廊下を走り出した――
あの後警察に色々と事情聴取されたのだが、僕がいくら人体模型が人を食べたって言っても誰も信じてくれなかった。

あの日からしばらく経ったが、未だに理科室には親友を殺した人体模型が置かれている。

理科室の噂（後書き）

あなたの学校にも自分に足りない部分を補おうとしている彼がいるかもしれないですね……

プレイボーイの手口（前書き）

※9／21訂正

プレイボーイの手口

ある都会の某クラブでとある男性がいた。その男性の容姿はそこそこ整っていて、今日もいつものように気になる女性に声をかけていつもの場所に向かっていた――彼はいつも気になる女性を見つけると声をかけて、その女性と二人きりで謎の自殺を遂げたある俳優の屋敷周辺を散歩する。そして謎の屋敷を通り過ぎると彼は

「何も感じなかった？　ここがさっき話していた屋敷なんだけど」

そういうとほとんどの女性が怖がって彼の腕にしがみつく。そうして彼は女性に対して

「大丈夫、俺が守ってやるから」

と言い、そのままホテルに連れ込む。そう、これが彼のやり口。――そうして、いつものように屋敷の前を通り過ぎ彼が口を開けようとした時女性が

「なんか錆び臭くない？」

「工事かなんかあったんじゃないの」

「違うよ！　生臭いっていうか、まるで血の匂いみたい……」

女性がそういうと、少し離れた所から丸い何かが近づいてくる。生首だ。女性はその生首を見つけたと同時に大声を出しながら何処かに走りだしてしまった……

対して彼は恐怖で身を固め、声は出ず、足が竦んで逃げることが出来ない。

生首と彼の距離が1メートルぐらいになると彼に向かって

「何故、いつも私を捜しているんだ！　何故だ！」

そう言った後、彼に向かって襲いかかってきた。その生首は彼の太ももに噛みつくと彼は慌てて自分の拳で殴りながら振り払おうとしたが、生首は離れてくれない。

そうして彼は痛みと恐怖で失神してしまった。

翌日彼が目を覚ますと道路の上。
彼は夢かと思い、自分の太ももを確認するとそこにはしっかりと歯形が残っていた。それを見たと同時に他にも痛みを感じて、自分の体を確認する。

すると首、手、腕、腹、脹脛、足とそれぞれ違う歯形を6種類発見した。そして自分の目では確認出来ないが背中にも複数の痛みを感じた……

プレイボーイの手口（後書き）

寝ている間に彼はいくつの生首に噛まれたのやら

私には見えるの　弐（前書き）

※9／21訂正

私には見えるの　弐

私は高校三年のあの夏の日から世間でいう『幽霊』というものが見えるようになってしまった。あの日から毎日のように『彼ら』は私の前に姿を現す。それは守護霊の時もあるが、一番私を苦しめたのがこの世に未練を残してしまった幽霊達であった……

高校を卒業して大学に進学をした大学で新しい友達が出来て、私はそれなりに満足していた。でも私にしか見えないもの――死後彷徨える者達――に関しては誰にも教えていなかった。

ほとんどの人には守護霊のような霊が一人後ろについている。道を歩く人々の後ろについている守護霊達を初めて見た時は私も怖くなってしまったほどだ。前後左右どこを見ても幽霊だらけのこの世の中に嫌気がさして外出が出来なくなった時期もあったが、今となってはそれも慣れて幽霊だらけの世界に何も感じなくなっていた。そして私の前にいる女友達の後ろにも守護霊がついていた。

大学の生活にもだいぶ慣れてきたある日、いつものように友人が私と会話をしようと近づいてきた。私はすぐに彼女の異変に気がついた。後ろにいる霊がいつもの守護霊ではなかったのだ。その霊はまるで彼女を恨んでいるような眼差しで睨み続けていた。彼女に対して「いつもと守護霊違うんだけど、何かあった?」とは聞けず、いつものように彼女とどうってことない会話を楽しんだ。

その次の日、また彼女が私に近づいてくる。……増えている。彼女を睨む霊が一人増えていたのだ。

そしてまた次の日と日を追うごと一人また一人と霊が増えていく。

そしてその霊達が約１０人ぐらいになった時、さすがに我慢が出来なかった私は彼女に聞く事にした。

「最近何かあった？」と。そして私は全て理解する事ができた。
彼女は大学に進学をしたと同時にキャバクラでバイトを始めたのだと言う。
私の予想だと後ろにいる霊達は……だろう。

しばらくして、彼女はキャバクラの常連客に金銭トラブルで首を絞められ殺害された。

彼女が殺されてしまったのは後ろにいた霊達の仕業なのかは私には分からない

私には見えるの　弐（後書き）

あなたの後ろにいる人は大丈夫ですかね

遊戯『かくれんぼ』《２００文字小説》（前書き）

２００文字小説にチャレンジしました。

遊戯『かくれんぼ』《２００文字小説》

絶好の場所に私は隠れている。
（もう～いいよ！）
私は友達が私を捜している姿を隠れながら見ている。
（私は目の前にいるのに、何で見つけれないんだろ？　ちょっと可笑しい）
「もう暗くなるから、早くお家に帰るよ！」
「分かった！　それより今日の晩御飯は何を作ったの？」
（帰らないでよ！　まだ私を見つけてないでしょ！）
私の心の声もむなしく、友達は母親と手を繋ぎ帰宅していく……
（私はお墓の中にいるんだよ！　早くみつけてよ！）

遊戯『かくれんぼ』《２００文字小説》（後書き）

彼女はいつになったら見つけてもらえるのでしょうか……

簡単調理教室《２００文字小説》（前書き）

また２００文字小説です。短いので二話連続投稿しました。

今回は少し明るめのホラーです。

簡単調理教室《２００文字小説》

1. 玉ねぎをミジン切りにして炒めます。
2. 挽肉に対して１％の塩を入れ、練ります。
3. パン粉に水を加え、ふやかしてから絞ります。
4. 卵を含め全ての材料を練り合わせます。
5. 空気を抜きながら形を整えます。
6. 真ん中をヘコまし、ヘコんだ方から先に焼きます。
7. フタをして蒸し焼きにし、中火のまま焼きます。片面がシッカリ焼けたら引っくり返し、またフタをして反対側を焼きます。

「ハイ！　人肉バーグの出来上がり！」

簡単調理教室《２００文字小説》（後書き）

本日は人肉１００％のハンバーグでした（笑）

『地上A』ボタン（前書き）

今現在の日本の人口は約一億二千万人。
そして、日本人の年間平均死亡者数は約百万人である。
※９／２１訂正

『地上A』ボタン

２０１１年夏、地上アナログ放送から地上デジタル放送に切り替わるので、僕はデジタル放送に切り替わる前に地デジ対応のテレビに買い換える事にした。

配達が終わって新しいテレビをリビングに設置し、電源を入れる。地デジの画面はアナログ放送と比べるともの凄く鮮明で、まるで生で芸能人達を見ているようで僕はとても感動した。
買い換えてから少し経ち、とうとう地上アナログ放送がその役目を終える時が来た。
７月２４日午前１１時５９分、テレビの番組でアナログ放送終了のカウントダウンが始まり、そしてカウントダウンがゼロになると同時にリモコンにあるアナログ放送のボタンを押すと画面にはアナログ放送終了のテロップが映っていた。
地上デジタル放送となった今このリモコンにある地上アナログ放送のボタンは何の使い道が無くなってしまった。

それから一ヶ月。僕はいつものように片手にお酒の入ったグラスを持ち、テレビ番組を楽しんでいた。
少し酔っていたのか、僕は何気なくリモコンに付いている『地上A』（アナログ放送切り替えボタン）と書いてあるボタンが気になり押してみた。
「ザーーーーーーーー」
画面いっぱいに白い点がランダムにポツポツと現れている。所謂（いわゆる）スノーノイズであった。
（まぁ当然か……）
少しでも何かを期待してしまった自分に馬鹿らしく思い、地上デジタル放送に戻そうとした時画像が切り替わった。

（なんだこれ？　手術室？）
そこは病室にある手術室のような場所で、誰かが手術を受けている。
画面に映っているのはアナログ放送とは思えないような相当リアルな映像であった……
（うっ気持ち悪くなってきた）
かなりグロテスクな映像であったが僕はテレビから目を放す事が出来なかった。いや、僕はその映像に魅入っていた。
２０分ぐらい手術映像を見ていると、突然「ピーー」と心拍停止をしらせる機械音が鳴ったと同時に画面はまたスノーノイズに切り替わってしまった。
僕はあまりにリアルな映像から、このアナログ放送は人間の最期を映していると思った。そうこう考えているうちにまた画面が切り替わった――

それから僕はこの番組に魅入られ、時間があれば必ず見るようにしていた。病死、安楽死、事故死、殺人などさまざまな死をテレビを通して観察する事を楽しむようになっていった。

人間はこんなに簡単に死んでしまうか
人間はこんなにも大勢死んでいるのか
人間はこんなにもろく弱い存在なのか

僕の心はどんどんそのテレビに吸い込まれていく。

いつものように僕はお酒を片手に持ち、リモコンの『地上Ａ』のボタンを押す。テレビ画面はスノーノイズの状態で、僕はドキドキしながら画面が切り替わるのを待っていた。
５分ほど経ち、画面が切り替わると……
（僕の部屋？）
画面に映っていたのは僕の部屋であった。その画面に映っていたの

は僕だけではなく女性の姿も映っていた。その女性を僕は知っている。その女性はテレビで夢中になりすぎた僕が別れた彼女であった。
僕はテレビ越しに彼女の右手に光る物が見えた。
僕は画面から目を離し、後ろを振り向くと同時に彼女の持っている刃物で刺されてソファーに倒れた。
（このテレビは僕の死期を映していたんだぁ）
僕はそう思っていたのだが、テレビの画面はまだスノーノイズに切り替わらなかった。
僕の意識はだんだんと薄れていく……
それでも僕はテレビ画面を見続けていた……

そうして、テレビ画面の最後に映っていたのは自ら刃物を手首に当てている彼女の最期だった。

僕はスノーノイズになると同時に意識を失った

『地上A』ボタン（後書き）

あなたのテレビのリモコンにアナログ放送用のボタンはありますか？
絶対に押してはいけないですよ

樹海の沼と婆ちゃん（前書き）

※９／２１訂正

樹海の沼と婆ちゃん

婆ちゃんの家に少年が遊びに行くと必ず言う事がある
『近くの樹海には入るんじゃないよ、底なし沼があって危ないから』
少年が「うん！　分かった」と言うと婆ちゃんは静かに少年に対して微笑んでくれた。

僕が中学生に入ると色々な苦痛が僕を苦しめた。学校では虐められ、家では除け者にされ、道を歩けば恐喝に遭う。自殺を考えた事も数え切れないほどあるし、何回も自殺しようとして失敗した。
だが、何であいつらが悪いのに僕が死ななくてはいけないのだろうか。僕は何も悪くない。
虐めた奴、恐喝をした奴、家族……
あいつらがみんないけないんだ！　あいつらが悪いんだ！　あいつらが死ぬべきなんだ！
僕の心は歪んだ、真っ黒に。

僕の嫌いな学校が終わり自宅に帰宅する。
「今日のご飯は？」
「……」
「母さん！　今日のご飯は？」
「うるさいな、あんたに作るご飯なんてないんだよ！　食べたければ自分で働いて稼いで、自分で買って食べな！」
母親がそう言い終わると僕の両手は彼女の首を掴んでいた。
気が付くと彼女は息をしていなかった。僕は両手を離して鏡に写る自分の顔を見た。僕は笑っていた。あぁこれでいいんだ、僕を苦しめるものが居なくなった。僕は間違っていない！　間違っているの

は目の前の息をしていない女だ。僕は彼女をボストンバッグに詰め込み、婆ちゃんが行ってはいけないと言った樹海に向かった。樹海に入り沼を見つけると僕はアイツを沼に捨てた。

次の日、樹海の沼に捨てたアイツを確認しに行くと死体は無くなっていた……

それから僕を苦しめる奴はみんな殺して樹海の沼に捨てた。次の日確認すると必ず死体は無くなっていた。何人も殺したら、僕を苦しめる人はいなくなっていった。

ある日、殺人をする前から優しくしてくれた婆ちゃんから連絡があり、僕は久々に婆ちゃんの家に遊びに行く事にした。

「婆ちゃん、ただいま！」

婆ちゃんは僕の姿を確認すると僕に

「私に隠し事してないかい？」

「してないよ！　急にどうしたの婆ちゃん？」

「あんたぁ、昔から行くなって言っている樹海に入ってないかい？」

「見　た　の……？」

「婆ちゃんが付いていくから、自首しよ」

（婆ちゃんもあいつらと同類か……）僕は婆ちゃんを無視して、キッチンに向かう――

『ザーーーーザーーーーザーーーー』

僕は婆ちゃんを引きずりながら、樹海に向かう。そしていつもと同じく沼に放り込んだ。

――次の日、死体は消えなかった。

樹海の沼と婆ちゃん（後書き）

今まで死体が消えていたのは？

インターネットサイト（前書き）

※9／21訂正

インターネットサイト

インターネットは暇な時間をいくらでも潰してくれる。
最近僕はとあるサイトを見つけた。

《イルカの夢でさようなら》

そのサイトを開くとセーラー服を着た女の子の下手な絵が描かれた画像が表示され、「私を殺してから先に進んでね」とスピーカーから聞こえる。
僕は恐る恐る女の子の画像をクリックする。
『グシャ』という音響と同時に先ほどまで普通だった女の子が口から血を出している画像が表示される。僕はもう一度クリックするとまた『グシャ』という音と同時に血だらけの女の子の画像がまた表示された。気持ち悪いサイトだと思いつつも僕はクリックを続ける……。女の子の原型は無くなり血溜まりの画像が表示された。僕の人差し指は止まることなくクリックボタンを押し続ける。
血溜まりが描かれていた画像はクリックを押すごとに元の女の子の画像に戻っていった。
（なんだこれ？　ちょっと気味悪いし意味不明だし……あれ？　まだクリック出来る？）
僕はゆっくりと女の子の画像をクリックする。
すると十個の黒い四角い物体の画像が膨張と縮小を繰り返しながら右から左へとスライドしている。
それぞれクリックすると気味悪い画像が出たり、変わった音楽が始まったり、広告が出たりした……
全てを見終えた僕はいったん観覧を止めて、ネットの掲示板でこのサイトの事を調べてみた――

結局このサイトはウイルスなどは無く、結構有名な人が作ったサイトらしい。
正直がっかりだ。もっと都市伝説的な何かがあると期待していたのに、普通のサイトだったなんて。
そんな事を分かった上でもう一度僕はあのサイトを開いてみた。

さっきまで見ていた女の子の絵の画像が真ん中に添付されている……
しばらく画面を眺めていたら、画面右下に点があった。
僕はマウスポインターを合わせてみる。クリック出来るようだ。
僕は押してみたが画像は切り替わらなかった。

「私を殺してから先に進んでね」

スピーカーからではなく、後ろから声がした。
僕が後ろを振り向いたら

インターネットサイト（後書き）

このサイトは実際あります。結構有名です。
「イルカの夢でさようなら」と検索したら出ます。
ＵＲＬ→ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｇｅｏｃｉｔｉｅｓ．ｃｏ．ｊｐ／ＡｎｉｍｅＣｏｍｉｃ－Ｃｅｌｌ／９４５９／１０．ｈｔｍｌ
これを作った人は相当心が病んでると思ってしまいます。

ポイ捨て（前書き）

※9／21訂正

ポイ捨て

「こらぁ！　お前なに捨てとるんじゃ！」
後ろからもの凄い形相で年配の男性が僕に怒声を浴びせながら歩いて向かってくる。
「お前は常識ってのを知らんのか！？　ゴミはゴミ箱に捨てなさい！」
「はぁ！？　ここはお前の土地か？　偽善者ぶりやがって、殺すぞ！」
僕は捨て台詞を吐いて、その場から離れていった。

次の日僕の家の前には大きなゴミ袋が一つ置かれていた。
（誰だよ！　ここはゴミ捨て場じゃないぞ）
僕はしょうがなくそのゴミを片付けた。
その日から僕の家の前には毎日何かしらのゴミが置かれていた。それはゴミ袋だけでは無く、生ゴミが撒き散らしてあったり、もの凄い数の蟲の死骸、車に轢かれたであろう野良猫……
僕は毎朝置かれている複数のゴミに色々と参っていた。

このままだと周りの住人達に何を言われるか分からないので、僕は犯人を捜す事にした。

犯人捜しを決断した深夜。
僕は部屋の電気を全て消しカーテンの隙間からいつもゴミが置かれている場所を観察していた。
しばらくしたら誰かが来たようだ……あいつだ！　以前僕にゴミのポイ捨てを注意した年配の男性だ。
僕は急いで自宅から外に出る。
「こらぁ！　お前なに捨てとるんだ！」

男性は僕を見つけるとゆっくりと口角を上げ
「ここはお前の土地か？　ここはお前の土地か？」
何も言わず、男性を殴った。その後その男性を警察に突き出して一件落着かと思っていたのだが――

もうあの男性の事は忘れていた時、僕がいつものように大学に向かうために玄関を開けると家の前には以前揉めた男性の死体と血まみれの包丁が捨ててあった。
初めて死体というものを見た僕は胃の中のものを全て吐き出し、急いで携帯を開いて１１０番を押した。その後パトカーが数台来て、僕は警官にあれこれ聞かれた。
そんな最悪な一日を過ごした次の朝。
玄関を開けて家を出た僕は警官に止められて、殺人容疑で逮捕された。「冤罪だ！」と何度も繰り返しても警官は聞く耳持たずで「詳しい話は署で聞く」の一点張りだった。

どうやらあの男性を死に追いやった凶器から僕の指紋がついていたらしい……

ポイ捨て（後書き）

あなたはポイ捨てしていませんか？　注意される前に止めるべきです

絶対に外さない占い師（前書き）

※９／２１訂正

絶対に外さない占い師

オフィスレディーの私が唯一自慢が出来る事は『タロット占い』。家族、友人、他人と今まで何人も見てきたが外れた事は絶対なかったはずだった。

ある日、会社の同僚の男性が私に対して怒り狂いながら罵声を浴びせてきた。

「お前の言う通りにしてきたけど、全然昇進しないじゃないか！これまで使ってきたお金全部返せよ！　返さなければ訴えるからな」

私はお金を払うことは無かった。そのせいで毎日のように彼や彼の友人達から会社で嫌がらせを受けることに……。私の味方も一人、また一人と私から距離を置くようになった。

何もかも嫌になった私は解決法を見つけるために自分を占うことにした。

占いを始める前に必ず行う儀式をする。

まず体を清めるために体の隅々の汚れを洗い落とし、三時間お風呂に浸かる。その後お風呂から出て真っ赤なマニキュアを爪に塗り、化粧で顔を彩り、占い用の衣服を着る。

準備が出来た私は椅子に座り、タロットカードをかき混ぜ一枚一枚机に並べていく。

私は自分の運命を表示したカードを見るとゆっくりと目を閉じ、小さく微笑む。

しばらくしてから立ち上がり窓を開け、

「私の占いは当たったわね……」

彼女はそう言って窓から――

残されたテーブルには死神のカードが残っていた

絶対に外さない占い師（後書き）

あなたは占いを信じてますか

タクシードライバー《２００文字小説》（前書き）

久々の投稿です。

タクシードライバー《２００文字小説》

「〇〇駅までお願いします」

「お客さん、電車乗り過ごしたんかい？」

「ちょっと飲みすぎちゃって・・・・・前の駅で降りるはずだったんだけど、居眠りしてしまってつい」

「そりゃ災難だな、〇〇駅まで１万円超えちゃうけど大丈夫なんかい？」

「そうですか、彼女と割り勘すればなんとか払えそうです」

「お客さんの彼女は〇〇駅で待ってるのかい？」

「今運転手の隣に座っているじゃないですか！？　冗談きついですよ！」

「……」

タクシードライバー《２００文字小説》（後書き）

会話文だけで一話作ってみました。

アルバム整理（前書き）

超久々の更新です

アルバム整理

夫とアルバム整理をしていた時、一枚の不思議な写真を見つけた。
それは私が始めて主産した時に撮った一枚――ベッドの上で我が子を抱きかかえて幸せそうな顔をしている――だった。
よく見なければ分からなかったが、そこには病院の窓に怨めしい顔している男性がうっすらと写っていた……
「何だよ！　これ！？　心霊写真？」
「悪い冗談言わないでよ、気味が悪い」
夫には冗談ぽく言ったのだが、私はこの写真に写る男性に見覚えがあった――私の夫は不動産関係の仕事をやっていて、私は所謂玉の輿に乗った。結婚のきっかけは私と夫に子供ができたからだ。……夫は自分の子供ではないとは知らないが。――この写真に写っている男性の霊は私の元彼氏。私が抱いている子供の本当の父親だった……
ただ、もうその男性はこの世にいない。私が自分の手で命を奪った男性が今もまだ私の前に現れるなんて図々しいと思った。

それからしばらくして子供が喋るようになったある日。
近くのスーパーに行くために子供を助手席のチャイルドシートに乗せると子供が
「パパいつになったら帰ってくるの？」
「お父さんはお仕事で忙しいから、夜遅くなるよ。」
「お父さんじゃないよ！　本当のパパだよ！」
「お父さんはお父さんでしょ？　本当ってどういう事？」
「パパ言ってたよ、お母さんがパパを……」
私は子供が最後まで言いきる前には首を絞めていた。

アルバム整理（後書き）

子供には罪がないのに……

私は捨てられないんです《２００文字》

私は物を捨てることが出来ない。

着ることのない衣服、必要のない物、燃えるゴミ、燃えないゴミ、読み終えた雑誌、空缶、空瓶、病死した犬と猫、末期癌で息絶えた私の母、私の家に対して色々と苦情を言ってくる隣の老夫婦、毎日のように私に対して結婚してくれると言ってくれたのに既婚者だった彼氏、その彼氏との間に出来た我が子……

これからも私の家には物がどんどん溜まっていく。

それでも私はそれらを捨てることはないだろう。

私は捨てられないんです《２００文字》（後書き）

あなたの家の近くにこういった人が住んでいませんか？

更新スピードが遅くてすみません！
今月はこれくらいのペースで書かせて頂きます。

財布の忘れ物（前書き）

４００文字程度のお話です。

財布の忘れ物

急にお腹が痛くなり、私は高速のパーキングエリアの駐車場に車を停める。
慌てながらも車から降りてトイレに駆け込み、ズボンを脱いで便座に座り込む。

私がトイレットペーパーに手をかけようとした時、そこに一つの財布があることに気が付いた。
無意識に財布の中身を確認するとそこには小さな黒いメモ帳が入っていた。
本当は一番最初に確認すべきなのは本人確認出来る物もしくは中に入っている現金なのだが、私はそんな事を考えもせず何かに魅入られたかのようにそのメモ帳を手に取り中を確認した。

山田賢治、斉藤洋子、山口理沙、成瀬武、宮元朱美、鈴木亮介……

メモ帳の中身には無数の名前が白い紙いっぱいに書かれていた、何ページも。そして名前を塗り潰すように何重もの斜線が引かれている。
初めのうちは意味が全然分からなかったが最後の名前を見て凍りついた。その名前にはまだ斜線は引かれていなかった……

最後の名前を見たと同時に人の気配がして

私はゆっくりと上を見上げた

財布の忘れ物（後書き）

財布の忘れ物を見つけた時は気をつけてください

ＴＤＬ（前書き）

遅くなるとか言いつつもわりと早めの更新です。

TDL

会社の夏休みが始まり、前々から彼女に行こうと言われて行くことになった東京デズニーランド。
入園するとそこにはデズニーのキャラクター達がお客達を盛り上げていた。
「ねぇ、あの着ぐるみってプーちゃん？　あんなキャラクターいたっけ？」
彼女にそう言われ、彼女の指の指す方向を見るとそこにはニッコリと笑っている真っ白な熊の着ぐるみが風船を持ちながらウロチョロしていた。
「デズニーみたいなのには疎いから、俺には分かんねなぁ」
「そっか」
俺と彼女は着ぐるみの事を解決出来ずじまいで、そのまま夢の国のアトラクションを満喫することにした――。

アトラクションを楽しみ、買い物も済ませた彼女はかなり満喫してくれたようだ。そのまま俺達は自宅に帰るためにデズニーランドから退園しようとしていた。
「あっ！　またあの着ぐるみだ！　何しているんだろう？」
彼女に釣られて、俺も顔を向けた。
例の着ぐるみは鼠の耳のカチューシャをつけた男女カップルを連れて、関係者以外立入禁止の所に入っていった。そして十秒もしない内に熊の着ぐるみだけがそこから出てきて、俺達の所に顔を向け一直線に俺達に向かってきた。
何故か俺は急に背筋に寒気がして危機感を感じ、彼女に「早く帰ろう」と言ったのだが彼女は夢の国でテンションが上がっているせいか帰ろうとしなかった。
着ぐるみは俺達の前に立ち可愛いポーズを決め、彼女の手を取り関

係者立入禁止に向かった。俺は少し嫌な予感がしていたが、「夢の国＝安全な場所」というレッテルがあったためか彼女を引き止めず楽しそうな彼女と着ぐるみに着いていった。

関係者立入禁止と書かれた扉を開け中に入ると熊の着ぐるみはすぐに外に出ていき、白い煙が四方八方から吹きだした。

「何かのアトラクションかなぁ？　もしかして、夢の国の隠されたアトラクションだったりして」

「そんなアトラクションあるのか？　聞いたことないけど？」

「あれ？　なんか眠くなって……き……た……」

「おい大丈夫か！？　いったん出るぞ！」

俺は慌てて彼女を抱えながら入り口から出ようとしたが、扉にドアノブが無かった。出たいけど出れないという状況が俺自身を混乱させた。

「『ドンッ！　ドンッ！　ドンッ！』連れが体調悪そうなので出して下さい！」

俺がどれだけ扉を叩き、どれだけ叫ぼうが係員は来なかった。そうして俺自身にももの凄い睡魔がきてその場に倒れこんだ――。

「危なかったよ！　冷や汗ものだよ」

「本当だな、もし見つかったらお前もあいつらと同じ運命を辿ることになるからな」

「冗談でもやめてくれよ！　あいつらのようには死んでもなりたくないよ」

男達の声が聞こえ、俺は瞼をゆっくりと開いた。そこには白衣を来た老人と着ぐるみの顔の部分を外した男性が立っていた。

（……動けない！？　しかも喋れない？）

「ようやく目を覚ましたか？　動けないって？　それは麻酔をしているからさ。急だけどもうすぐ手術するから、これから頑張って働

いてくれよ」
（何を言っているんだこの人は？）
俺が不思議そうな目をしていたのか、着ぐるみを半分脱いだ状態の男性が顔を寄せて見下すような目で
「ほんとゴメンな！　お前はこれから記憶を消されて着ぐるみになる手術を受けるの！　それから訓練してデズニーランドの着ぐるみとして一生働くの！　ガッハッハッハ！　そいじゃ今日はお先にあがらせてもらいまーす。お疲れ様でした！」
（記憶を消す？　着ぐるみになる？　一生働く？）

「もうそろそろお前さんの彼女の手術も終えたみたいだから、お前さんの番だな」
彼がそう言うと俺を乗せた台車が動き出した……
俺は混乱しながらも必死に体を動かそうとするが少しも動けない。
必死に叫ぼうとするが叫べない。

（助けてくれ！　まだ就職したばかりだし彼女ともこれから……
……嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ）
僕が心の中で叫び続けても、誰も返事はしてくれない。

（誰か助けてくれ……）

「わぁー！　プーちゃんだぁ！　お母さん写真撮ってぇ」
彼は今日も何も考えず無邪気に着ぐるみとして働いている

ＴＤＬ（後書き）

遊園地での見慣れない着ぐるみにはご用心を……

学生時代の青春（前書き）

更新スピードが落ちますなんか言っちゃって、二日連続投稿です。
今回は分かりやすいソフトホラーです。

学生時代の青春

「昔から好きなんです！」

僕は高校の同級生の彼女に校舎の屋上に呼び出されて、突然こんなことを言われた。

突然と言われても告白されるだろうと予測できたのだが……

「本当に？　こんな俺の何処がいいの？」

この自惚れた台詞は間違っていない。

外見は中の中、惚れられるような中身でもない。

僕は不思議で不思議で仕方なかった。

「昔からずっと好きだったの」

彼女は好きといった漠然とした事しか言わなかったのだが、僕は彼女に好きと言われて正直嬉しくて舞い上がっていた。

「分かった。こんな俺で良かったら、宜しくお願いします」

「ありがとう」

そういって彼女は僕に一歩踏み寄ってきた。

「目を閉じて」

（まじかよ！　早くないか！？）

そんな事を考えつつも男性としての本能が目を閉じさせた。

（痛っ！）

痛みを感じた腹部を見ると、そこには半分お腹の中に入っている包

丁があった。刺された腹部から激しい痛み、そしてそこから流れ出す血液が白シャツを真っ赤に染める……

「な……ん……で……？」

「私、昔から大好きなの。人が死んでいく顔を見るのが」

学生時代の青春（後書き）

普通の告白なら良かったのにね……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0685v/

短編ホラー小説集

2011年10月20日09時21分発行